

るあれば、悔改むるを要せざる九十九人の義者のためよりも天にては斯く喜悅あるべし。」

失ひたる金銭 路十五ノ八一

「或はまた孰の婦人か十枚の金銭ありて、其一枚を失はば、燈火を燃して家を掃き、遂に之を看出すまでは勤めて捜さばらんや。而して之を看出したる時には、其の朋友と隣人を呼集めて言はん、「我その失ひたる金銭を看出したれば、我とともに喜べ。」我なんぢらに告ぐ、一個の罪人が悔改めたる爲には斯くこそ神の聖使たちの前に歡喜あるなれ。」

放蕩息子 路十五ノ十一

イエスまた言たまはく、「或人二個の子あり、其中の季子その父に言けるは、「父よ、我に歸すべき家産の分を我に予へたまへ。」父乃ち家産を彼等に分てり。幾日もあらぬ後、季子は一切を掻集めて遠國へ旅立ち往けり、而して彼處に奢り生活しつ、その家産を浪費せり。已に一切を蕩盡せし後、かの國に大饑饉起りて、彼漸く乏くなりぬ。是に於て彼往て該國の某市民に縋りつきたれば、酒ち之を其野に遣りて、豕を牧しめき。今は豕の食ふ豆莢を以てなりとも其腹を充さんと欲したれども、誰も彼に興ふる者なし。彼やがて自ら省悟て曰く、「吾が父の家に

は麩餅に飽る傭人幾多なるぞや！然るに我は茲に餓て死なんとす。起て吾が父に詣りて之に言はん、父よ、我は罪を天にもまた汝の前にも獲たり、今は汝の兒と稱するに足らず、請ふ我を汝の傭人の一人のごとく見做したまへ。」彼すなはち起あがりて、其父に詣りけるが、尙遠くありしに、其父之を認めて、悲憫を興し、趨り往きつ、其の頸を抱へて之に接吻せり。兒乃ち之に言けるは、「父よ、我は罪を天にもまた汝の前にも獲たり、今は汝の子と稱するに足らず。」父その家僕等に言けらく、「疾く最上の衣服を取きたりて彼に着せよ、指輪を彼が手にはめよ、履を彼が足にはかせよ、而して茲に肥たる犢牛を牽來て宰れ、我等食ひて宴樂まんとす、吾が此兒や死にて復生き、失て復得たれば也。」即ち宴樂み始む。時に其長子は田圃にをりしが、來りて家に近づくと、奏樂と跳舞の音を聞きたれば、僕等の一人を呼びて、其何事なるかを問けるに、之に言けるは、「弟君來ましたれば、父君其を恙なしに得たりとて肥たる犢牛を宰りたまへる也。」是を以て彼怒り、家に入るを肯せざりしかば、其父出でて彼を勸めけるに、答へて其父に言けるは、「視よ、我や多年なんぢに事へ、未だ嘗て汝の命令を背かざるに、汝は未だ嘗て我をして吾が朋友と樂ましむる爲に一匹の山羊羔をだも我に予へざりし、然るに汝の此兒、



娼婦等とともに其家産を吞蝕せし者僅に来るや、迺ち彼がために肥たる積牛を幸れり。父かれに言けるは、一兒よ、汝は恒に我と共に在り、吾が一切の物は汝の者なり。されど汝の此の弟や死て復生さ、失て復得たる者なれば、我等宴樂み且祝はざるを得ず。」

不正なる家宰 路十六ノ一

イエス亦その弟子たちに言たまひけるは、「茲に富る人ありて、一個の家宰を有したりしが、其者主家の財産を耗せしと訴へられしかば、則ち之を呼びて、之に言けるは、「汝の身につきて我が聞たる所は何事ぞや？ 汝が家宰たる間の會計を呈出せよ、汝は最早家宰たることを得ざれば也と。」家宰心の中に言けるは、「吾が主人われより家宰の職を褫ひたれば、今より何を爲すべきや？ 土を掘るには堪へず、食を乞ふは羞かし、我爲すべき事を知れり、吾が家宰の職を罷られたらん時人々をして我を其家に接いれしめん」と。是に於てか彼その主人に負債ある者を悉く呼あつめ、先その首なる者に言らく、「汝は吾が主人に幾何の負債あるや？」曰く、「油百樽なり。」家宰これに言けるは、「汝の契券を取り、急ぎ坐して五十と書けよ。」然る後次の者に言らく、「汝は幾何の負債あるや？」曰く、「麥百斛なり。」家宰これに言けるは、「汝の契券を取て、

八十と書けよ。」斯く其の爲す所の巧智ければ、主人も其の不正なる家宰を譽たり、如何となれば斯の世の子等たるや、其社會に於ては、光明の子等よりも卻て巧智ければなり。我なんぢらに告ぐ、汝等も不正の財寶を以て友をつくれ、庶幾くば汝等命盡る時に於て彼等なんぢらを永遠の住宅に接いれん。抑も小き事において忠なる者は大いなる事においても亦忠なり、小き事において不正なる者は大いなる事に於ても亦不正なるなり。されば汝等もし不正の財寶に於てすら忠ならずば、誰か眞誠の財寶を汝等に托せんや？ 汝等もし他人の有に於て忠ならずば、誰か汝等の有を汝等に與へんや？ 僕は二人の主に兼事ふるを得ず、或は一人を惡みて一人を愛し、或は一人に親みて一人を疎まん、汝等は神とマンモン(財寶)に兼事ふるを得ず。」

利を好む者の譬喩 路十六ノ十四、十五

然るにバリサイ徒は利を好む者にして、此等の事を都て聞て、イエスを嘲けりぬ。

イエス彼等に言たまひけるは、「汝等は人々の前に自ら義とする者なり、然れども神は汝等の心を知たまふ、畢竟人々に高しとせらるゝ物事は神の前に忌むものぞかし。」

「嘗て一個の富人あり、紫袍をまごひ、細布を着、日々に奢て宴樂を事とせり。またラザロと



名づくる一個の乞食あり、腫物満て、その門前に偃せり、その富者の食卓より遺る屑を以て飽んことを欲したれども、誰も與ふる者なかりき、且犬ども來りて其腫物を舐れり。かくて其乞食死するや、聖使等に携へられてアブラハムの懷に至れり、富る人もまた死して葬られき。彼陰府にて痛苦を受け、目を擧げて遙にアブラハムと其の懷にあるラザロとを見れば、叫びて曰く、「父アブラハムよ、我を憫れみ、ラザロを遣はし、其指の先を水に浸して吾が舌を涼しめ給へ、我は此の火獄の中に苦めば也。」アブラハム之に言けるは、「子よ、汝は其生る時に善物を受け、ラザロは同く惡物を受けたるを憶えよ、因て今彼は慰められ、汝は苦めらるゝ也。此事を凡て外にしても、我等と汝等との間には巨大なる淵の定めおかれたるあれば、此より汝等の處へ濟らんと欲する者も、彼處より此へ越んと欲する者も、俱に能はざるなり。」彼また言らく、「父よ、然らば我なんぢに願ふ、ラザロを吾父の家へ遣はし、我に五人の兄弟あれば、彼等にむかひて證據をなさしめ給へ、恐くは彼等もまた此苦惱の處に來らん。」アブラハム彼に言けるは、「彼等にはモーセと預言者あれば、之に聽かしめよ。」彼いひけるは、「父アブラハムよ、然らず、さりながら若し死者の中より彼等に到る者あらば、彼等悔改めん。」アブラハム彼に言

けるは、「彼等もしモーセと預言者に聽せば、死者の中より甦へる者ありとも信せざるべし。」

『我等の信仰を増したまへ』 路十七、五

使徒たち主に言けるは、『我等の信仰を増したまへ。』

主言たまはく、『汝等もし芥種一粒の如き信仰にあらば、茲の桑樹に「自ら抜けて海に移り植れ」と言んに、必ず汝等に順はん。汝等の中誰か耕し或は收する僕あらんに、其田野より歸るや、「汝直ぐ往きて食に就けよ」と之に言ふ者あらんや、却て言すや、「我が晚餐を食ふ準備し、我が食ひ飲むまで、帶して我に給任せよ、然る後なんぢ食ひ飲むべし。」其僕主の命じたる事どもを行ひたればとて主これに謝するや、「我思ふに然らず、斯く汝等もまた其命せられたる所を悉く行ひたらん時に言へ、「我等は無益の僕なり、宜く爲すべき所の事を爲したる而已。」』

第六章 エルサレム附近——イエスを殺さ  
んどの企圖



茲にラザロといふ一個の病人あり、マリアと其姉妹マルタの邑ベタニアの者なり。マリアは嚮に香油を以て主に塗り、己の髪を以て主の足を拭ひたる婦人なり、其兄弟ラザロ疾めり。是を以て彼が姉妹等イエスの許へ言ひ遣はしけるは、「主よ、視たまへ、汝の愛する者疾むと。」

イエス聞て之に言ひたまはく、「斯の疾病は死に至らず、唯神の榮光の爲にす、即ち神の子之に由て榮えせられんとす。」

イエスはマルタと其の姉妹マリア、並にラザロを愛したまへり、是故に彼が疾むを聞かや、同處に尙二日留まれり。

斯て後イエス其弟子たちに言たまはく、「重て我等はユダヤに赴かん」と。弟子等イエスに言けるは、「ラビ、ユダヤ人只今汝を石擲んと求めたり、然るを復も彼處へ往きたまふか？」

イエス答へたまはく、「一日には十二時あるに非ずや？人若し晝あるかば躓蹶かじ、此世の

光を見るに因りてなり、然ど人若し夜歩かば、躓蹶かん、彼に光あらざるが故なり。」

此等の事を言ひ終りて、然る後イエス彼等に告げ給ひけるは、「我等の友ラザロは眠れり、然し乍ら我は彼を唾眠の裏より喚起さん爲に往く。」

是を以て其弟子たち言けるは、「主よ、彼もし眠れるならば、瘥べし。」

イエスは彼の死を言たまひしなるに、彼等は其が眠りて寝たるを言給ひしと思惟たり。

是に由てイエス頓て明白地に彼等に告たまはく、「ラザロは死せり、我は我が彼處に在らざりしを汝等の爲に喜ぶ、汝等をして信せしむるを得べければ也、いざ彼の所へ往かん。」

是を以てデドモと名くるトマス其同門弟子たちに言けるは、「我等も亦往きて、彼と死を借にせん。」

斯てイエスは至りて見給ひしに、彼は墓にて已に四日を経たり。

ベタニアはエルサレムに近くして、約そ廿七丁なり。許多のユダヤ人マルタとマリアに至りつ、彼等を其の兄弟の故に因て慰められてありき。

茲にマルタはイエス來ませりと聞かや、之を出迎へたり、但しマリアは家に坐せり。マル



タ乃ちイエスに言けるは、「主もし茲に在したならば、吾が兄弟は死せざりつらん。然し乍ら今にても我は知る、凡そ汝が神に求めたまふ所の者は、神これを汝に與へたまふべし。」

イエス彼に言たまはく、「汝の兄弟は復活るべし。」

マルタ イエスに曰けるは、「末の日の復活の際に彼が復活らんことを我は知る。」

イエス彼に言たまはく、「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死すとも活きん、凡そ活き且我を信する者は永遠に死せず、汝これを信するや？」

かれイエスに言けるは、「然り、主よ、汝は活る神の子キリストにして、斯世に來ませる者と我は信せり。」

是を言ひ訖るや、往きて密に其の姉妹マリヤを呼びて、曰く、「師茲に在りて、汝を召すと。」

彼聞くや、即ち速かに起ちて、イエスの所に往けり（是はイエス未だ邑に入らず、マルタが出て迎へし夫處に尙居たまひたればなり）。是に於てかマリヤと與に家にありて之を慰めをれるユダヤ人等は、彼が速かに起ちて出ゆけるを見るや、彼慕へ往きて其處に哭かんとすと謂ひつ、彼の後に從へり。

斯てマリヤはイエスの在せる處に至りつ、之を見るや、其足下に俯伏して、之に言けるは、「主よ、若し此に在したならば、吾が兄弟は死せざりつらむ。」

時に、イエスは彼が哭き、また彼と偕に來れるユダヤ人の哭くを見給ふや、心を憫みて、自ら安んぜず、やがて言ひたまはく、「彼を何處に置きしや？」

彼等イエスに言ふ、「主よ、來り觀たまへ。」

イエス哭きたまふ。

是に由てユダヤ人等言けるは、「視よ、如何に彼を愛したる者ぞや？」其中或者いひけらく、「彼は盲に生れたる人の目を開きし者なるに、斯の人をして死ざらしむる能はざりし乎？」

是に於てイエス再び心を憫しめて、墓に臨みたまひしが、墓は洞にて、石を其上に蓋せり。イエス乃ち言たまはく、「石を取のけよ。」

死者の姉妹マルタ イエスに申しけるは、「主よ、彼は既に臭し、四日を経たれば也。」

イエス彼に言たまはく、「汝若し信せば、神の榮光を見るべしと我なんぢに告げしに非ずや？」



是に於て石を取のければ、イエス乃ち目を天に擧げて、曰く、「父よ、我に聴きたまひしを謝したてまつる、我は固より汝が恒に我に聴たまふを知れり、然れども環り立てる人々の爲に我は之を白せり、庶幾くば汝の我を遣はしたまへることを彼等信するを得ん。」

是を言ひ竟り給ふや、大聲に呼りて、曰給はく、「ラザロよ、出で來れど。」

死者忽ちに出で來れり、足と手は巻布にて包まれ、其面は手巾にて裏まれてありき。イエス廻ち人々に言ひたまはく、「彼を解て、行しめよ。」

是に於て夫のマリヤとマルタ許來りをりて、イエスの成したまひし事等を見たるユダヤ人の中には、イエスを信したる者多かりき。然し乍ら其中の若干はパリサイ徒に往きつ、イエスの成したまひし事等を彼等に告ぎ。

議會の決議 約十一ノ四十七―五十三

是を以て祭司長等と、パリサイ徒等議會を開きて、曰く、「斯人許多の休徴を成せば、我等如何に爲すべき乎。若し彼を此まゝに恕しおかば、皆彼を信せん、而して遂にはローマ人來り、我等の處に此の國民をを殄滅さん」と。」

但し其中の一人カヤパと名くる者、彼の年の大祭司にして、彼等に言けるは、「汝等は何をも知らず、又一人民の爲に死して全國民の涙びざるは汝等に益する者なるをも汝等は思はざる也。」

此は彼自ら案へて言ひしに非ず、彼の年の大祭司として彼はイエスが國民のために死せんことを預言したる耳。是は實に此の國民の爲にするのみに非ず、又是れ散ばれる神の子等を一起に集めんとするに在るなり。

是を以て彼の日よりして彼等はイエスを殺さんと謀りぬ。

### 第七章 エフライムへの退却

神の國の來る事 約十一ノ五十四、路十七ノ二十一

さればイエスはもはやユダヤ人の中を顯然には歩き給はず、荒野に接する鄙地に往き、エフライムと云ふ邑に至りて、其處に其弟子たちと偕に留まり給へり。

神の國は何時來るべきやとパリサイ徒に問ければ、イエス乃ち之に答へて言たまはく、



「神の國は目だちて来るものに非ず、また「是れ視よ此處に！」視よ彼處に！」といふべき者にあらず、夫れ神の國は汝等の中に在るなり。」

イエスまた其弟子たちに言たまはく、「汝等人の子の一を見んと欲する日來らん、而も汝等は之を見ざるべし。人々なんぢらに言はん、「視よ此處に！」視よ彼處に！」汝等は往く勿れ、從ふ勿れ、そは天の下より閃めき出る電光の倏忽にして天の下の有ゆる物を照すごとく、人の子も其日においてや亦然るべし。然れど人の子は先多くの苦を受け、且此の民族に棄れざる可らず。」

「ノアの日に起りし如く、人の子の日にも亦然らん。ノアの方舟に入る日まで、人々食ひ飲み、妻を娶り、嫁に適きてありしが、洪水きたりて、彼等を盡く滅ぼしぬ。また是れロトの日に起りし如けん、即ち人々食ひ飲み、賣買、植ゑ建ててありしが、ロトのソドムより出し日天より火と硫黄を降して、彼等を盡く滅ぼしぬ。人の子の顯はれん其日にも斯の如くならん。其時刻には、屋蓋にをりて家の裏に器具ある者は、之を取んとて下る勿れ、畑に在る者もまた同じく歸る勿れ。ロトの妻を記憶せよ。凡そ己の生命を救はんを求むる者は之を失ふべく、凡そ

之を失はばん者は之を保つべし。」

不正の裁判官 路十八ノ一

イエス亦譬喩を彼等に語り、宜く恒に祈禱て倦ざるべき事を諭して、曰たまはく、「或る邑に神をも畏れず、人をも敬はざる一人の裁判官ありけるが、其邑に一人の寡婦あり、彼に詣りて言く、「我に仇する者あれば之に復讐したまへど。」彼久しく肯せざりしが、其後心中に謂けるは、「我は神をも畏れず人をも敬はずと雖も、而も此の寡婦は我にうるさければ、之が爲に復讐をなさん、恐くは絶す來りて我を惱さん。」主いひたまはく、「不義なる裁判官の言たる所を汝等聽よ、况て神は其の選びたる者の日夜おのれに顧はるを復讐したまはざらんや？ 彼等の苦めらるゝを豈忍びたまはんや？ 我なんぢらに告ぐ、神は迅速に彼等の爲に復讐し給はん、然し乍ら人の子來るとき豈信仰を世に見んや？」

パリサイ徒と税務官 路十八ノ九

自ら待みて義となし、他を侮るが如き人々にむかひてイエスはまた此の譬喩を語りたまへり。「二個の人祈禱んとて神殿に登りけるが、一はパリサイ徒、他は税務官なり。パリサイ徒立



で、心中に斯く祈れり、「神よ、我は餘人のごとくならず、即ち勒索者、不義なる者、姦淫する者にも、亦此の税務官にも似ざるを汝に感謝したてまつる。我は一週に二回断食す、凡て有る物の什一を献すと。」税務官は遠く下り立ち、目を天に擧るだに敢てせず、其の胸を拆て、曰く、「神よ、我が此罪人を憐みたまへと。」我なんぢらに告ぐ、此人は彼の人よりも義とせられて、其家に降りゆけり、如何となれば、凡そ自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせらる可れば也。」

離婚に關する事 二十九ノ三

時にパリサイ徒進み寄り、彼を試みて曰く、「何の故に拘はらず、人その妻を出すは可や？」イエス答へて彼等に言たまはく、「汝等いまだ讀ざるか、元始に人を造りし者は之を男と女に造りたまへり、曰く、『是故に人は父母を離れて其妻に合ひ、二人の者一體となるべしと？』されば已に二人にあらず、一體なるなり。故に神の配せたまへる者を人は分つべからず。」彼等イエスに言けるは、「然らば何故にモーセは離縁状を與へて妻を出すを命せしや？」彼等に言たまはく、「モーセは汝等の心の無情なるが爲にこそ妻を出すことを汝等に准せし

なれ、元始よりは斯あらざりき。されど我汝等に告ぐ、邪淫のためなる外、その妻を出し且他に要るものは、是れ姦淫を行ふなり、又その出されたる妻を娶る者も姦淫を行ふなり。」弟子たち彼に言けるは、「人その妻に於ること斯の如くば娶らざるに若す。」イエス彼等に言たまはく、「皆人この言を受納ること能はず、唯賦られたる者のみ之を爲し得べし。抑も母の胎より然生れたる寺人あり、人より爲れたる寺人あり、又天國の爲に自らなれる寺人あり、之を受納ることを得ものは受納べし。」

イエスと孩兒 可十ノ十三

時にイエスに捫られんとて孩兒を彼に携へ到れる者ありけるに、弟子たち其の携ふる者等を叱れり。イエス之を見て、怒りて彼等に言たまひけるは、「孩兒等の我に來るを容せ、彼等を禁むる勿れ、神の國は是のごとき者なれば也。我まことに汝等に告ぐ、孩兒の如く神の國を接ざる者は竟に之に入じ。」

乃ち彼等を抱き、其上に手を按て之を祝し給へり。

富める少年 二十九ノ十六、可十ノ廿一、二十九ノ廿一、三十、可十ノ廿四、廿五、二十九ノ廿五、三十、



視よ、イエス途に出たまひけるに、一人の幸趨り來り、前に跪つきて彼に問けらく、「善き師よ、かぎりなき生命を獲んには、何の善を爲すべしや？」

イエス彼に言たまはく、「何ぞ善を我に問ふや？善者は獨、すなはち神なり。但し汝もし生命に入んと欲せば、誠を守れ。」

彼いはく、「何の誠ぞや？」

イエス曰たまはく、「人を殺す勿れ、姦淫する勿れ、偷盜む勿れ、偽證をなす勿れ、汝の父および母を敬へ、また汝の近隣者を己の如く愛すべし。」

少年幸イエスに言けるは、「我幼時より之を皆守れり、尙何ぞ缺たる所あるや？」

イエス彼を注視め、彼を愛して、告たまはく、「汝なほ一を缺り、往て汝の所有を悉く賣り、貧き者に與へよ、然らば天にて財寶を有ん、而して來りて我に従へ。」

少年者この言を聞き、憂へて去れり、是は多大の所有ありたれば也。

イエスその弟子たちに告て曰く、「我まことに汝等に告ぐ、富者は天國に入るに難し。」弟子等その言を驚けり。イエス復答へて、彼等に言たまひけるは、「小子よ、財寶を恃む者の神の

國に入るは如何に難い哉！駱駝が針の孔を通るは、富者の神の國に入るよりも易し。」

弟子たち之を聞て、甚だ異みて曰らく、「然らば誰か救はるゝを得ん？」

イエス目を注ぎて彼等に言たまはく、「是れ人には能はざる所なれど、神には能はざる所なし。」

時にペテロ答へてイエスに言けるは、「視よ、我等は一切を棄て汝に従へり、然ば我等は何を獲べきや？」

イエス彼等に言給はく、「我まことに汝等に告ぐ、我に従へる汝等は、復生に方りて、人の子其の榮光の座に坐せん時、汝等も十二の座に坐してイスラエルの十二族を審判ん。凡そ吾が名の爲に家、あるひは兄弟、あるひは姉妹、あるひは父、あるひは母、あるひは妻、あるひは子、あるひは田畑を舍る者は、百倍を受け、且かぎりなき生命を保有ん。但し先なる多衆の者は後になり、後なる者は先になるべし。」

葡萄園の譬喩 太二十ノ一

「天國は朝夙に出て其の葡萄園のために工者を僱ふ家父のごとし。彼工者に一日銀一枚を約



して之れを其葡萄園に遣はせり。彼九時ごろ出て市に空く立てる者どもを見、之に言けるは、「汝等も我が葡萄園に往け、相當の者を汝等に與へん」と。彼等の往ける後、また十二時と三時ごろ出て、亦是の如くせり。五時ごろ復いで、他の立る者どもに遇ひ、之に言ふ、「何を終日空しく茲に立てるや？」答へて曰く、「我等を僱ふ者なきが故なり。」家父すなはち彼等に告て曰く、「汝等も吾が葡萄園に往け。黄昏になれるや、葡萄園の主その家宰に言けるは、「工者を召び後の者より始めて、先の者にまで、之が賃銀を給せよ」と。因て五時ごろ來れる者等先づ至りに、各々銀一枚を受たり。先の者ども亦至りしが、我等は必ず多く受るならんと思ひしに、己等も各々銀一枚を受たり。受るや、家父にむかひて呟き、言けらく、「此等後の者どもは一時働さしのみなるに、終日勞苦して暑熱を忍びし我等と彼等とを同じくしたまふ。」彼その一人に答へて曰く、「友よ、我は汝に不義をせず、汝は我と銀一枚の約をなしたるに非ずや？汝の分を取て去れ、我は此の後の者にも亦汝のごとく與へんと欲す。我は我が欲することくに行ふべからざるか？我善きが故に汝の目悪きや？」是の如く後なる者は先になり、先なる者は後になるべし。」

### 第八章 エルサレムへの最後の旅行

十字架の影路十八ノ三十四

皆共にエルサレムへ上る途に就くや、イエスは彼等の先に立て行給へり、彼等は驚き且懐て後に跟随へり。時にイエス十二人を携へて、其將に己に臨まんとする所の事等を之に告始めて、曰給はく、「見よ、我等エルサレムに上るや、人の子を指して預言者等が書きたる所の事は悉皆成就せん、即ち祭司長等と學者等と長老等の手に賣れ、彼等かれを死に定め、彼を異邦人に交附さん。而して彼を嘲辱り、彼に睡し、彼を鞭ち、彼を殺さん、斯くて彼は三日めに甦へらんと。」

彼等は此等の話を少しも解せざりき、此の語かれらに隠れてありき、彼等は其言れたる事どもを解せざりし也。

雷の子太二十ノ二十一、二十二、可十ノ三十八、四十、太二ノ十、廿三、可十ノ四十一、四十四、太二十ノ廿八、  
時にゼベダイの子等の母、其子等と偕にイエスに詣り、拜して願ふ所あらんとす。



イエス彼に言たまはく、「何を望むや？」  
彼いひけるは、「斯の二人の吾が子を汝の御國にて一人は汝の右に、一人は汝の左に坐せし  
むるやう命じたまへ。」

イエス答へて曰たまはく、「汝等は願ふところの何なるを知ざる也、汝等は我の飲まんとする  
杯を飲み能ふや？又我の洗禮せられんとする洗禮にて洗禮せられ能ふや？」

彼等イエスに言ふ、「我等は能ふなり。」

イエス彼等に言たまはく、「汝等は寔に吾が飲む杯を飲ん、又吾が洗禮せらるゝ洗禮にて洗  
禮せられん、されど吾が右あるひは左に坐することは、我の汝等に賜ふべきに非ず、唯吾が父  
の之を備へたまへる者にのみ賜はるべし。」

十人聞て、ヤコブとヨハネを憤はれり。

イエス彼等を召て、之に言たまはく、「汝等は知る異邦人を治むる者を見ゆるや、必ず之に主  
となり、又其の君たる者は之が上に權を振ふ。汝等の中にては然らず、却て大ならんと欲する  
者は汝等の役者となるべし。また汝等の中凡そ首位とならんと欲する者は皆の僕となるべし。

斯の如く人の子の來れるも事へらるゝ爲に非ず、却て事へん爲め、且衆の救贖に其の生命を捐  
ん爲なる耳。」

エリコの醫者 可十ノ四十六

斯てエリコに來れりしが、イエス其弟子等とともに大衆衆を從へてエリコを出給ふ時、テ  
マイの子醫バルテマイ途の傍に坐して乞をりしが、ナザレのイエスなりと聞かや、叫び始めて  
曰く、「ダビデの子イエスよ、我を恤みたまへ。」

許多の人彼を叱りて黙せしめんとしたれども、彼ますく叫ぶらく、「ダビデの子よ、我を  
恤れみたまへ。」

イエス止り、「彼を召べ」と命じ給ひければ、人を醫者を呼て之に曰ふ、「安んせよ、起て、  
彼なんぢを召ぶ。」彼すなはち其の衣を擡遣つ、飛躍て彼に來れり。

イエス答へて彼に言たまはく、「我が汝に何を爲んことを欲するや？」

醫者イエスに申すらく、「ラボニ、見えんことを欲す。」

イエス彼に言たまはく、「往け、汝の信仰汝をして痊しむと。」



彼忽ち見るを得るに至り、途に彼を送れり。

ザアカイを訪れ給ふ路十九ノ一

イエス エリコに入りて通り行給へり。其處にザアカイと名くる人あり、税務官の長にして、富り、彼イエスの誰なるかを見んご求めたれども、身長矮かりければ、群衆のために見能はざりしかば、乃ち前へ趨り、桑葉無花果樹に攀上りて、彼を見んごせり。是はイエスこそを通り給はんごしたれば也。

イエス其の處に到り給ふや、仰いで彼を視、即ち彼に言たまはく、「ザアカイよ、急ぎ下れ、今日われ汝の家を駐らざる可らざれば也。」

彼急ぎ下り、歡びてイエスを接したり。

衆みな之を見るや、吐きて曰く、「彼は罪人に客たりと。」

ザアカイ立て、主に申けるは「視よ、主、我は吾が財産の半を貧者に施す、若われ何人より何物をか欺き取りたるあらば、四倍にして之に償はん。」

イエス彼に言たまはく、「今日此の家の爲に救拯成れり、彼もまたアブラハムの子なるに因

てなり。抑も人の子は亡ぶる者を尋ねて救はん爲にこそ來れるなれ。」

斤の譬喩 路十九ノ十一

彼等これを聞つゝある時、イエスマた之に加へて一の譬喩を語りたまへり、是は身みづからエルサレムに近くなり給ひしに因り、又彼等神の國直ちに顯るべしと思ひしに因りてなりき。故に即ち言たまはく、「或る貴人みづから封國を受けて歸らんとて遠き地へ往けり。先その十名の臣僕を召つ、之に金十斤を授けて、「汝等我が來るまで是にて業を營めよ」と之に囑けおぎぬ。然るに其民かれを惡みたれば、後より使者を之に追遣して、言しむらく、「我等は此人の我等に君臨するを欲せず。」

「彼封國を受けて歸れるや、命じて其營て金を授けおける臣僕等を召さしめ、其が各々幾何の業を營みたるかを知らんとす。首の者進みて白しけるは、「主よ、汝の一斤もて十斤を贏け獲たり。」主かれに言けるは「善哉良臣よ、汝は僅少の物に忠なりしに因て、十の邑に宰として權を乘るべし。」次の者進みて白しけるは、「主よ、汝の一斤もて五斤を贏け獲たり。」主かれに言けるは、「汝も五の邑に宰たれ。」然るに一人進みて白しけるは、「主、汝の一斤は茲にあり、之を我



は手巾に藏めおけり、汝は嚴き人なるに因りて我は汝を懼れたり、汝は置ざる物を取り、播ざる物を獲るなり。」主彼に言けるは、「不良の臣よ、汝の口に本づきて我なんぢを鞠かん、汝は我が嚴き人にして、其置ざる物を取り、播ざる物を獲るを知れり、さらば何とて吾が金を銀行に交さうりしや？ 然らば我來りて利と借に之を受ざるを得んぞ。」乃ち侍臣等に言けらく、「彼より其一斤を奪ひて十斤を有る者に與へよ。」侍臣等之に白しけらく、「主、彼は既に十斤をもてり。」併し我なんぢらに告ぐ、「有る者には尙與へられて餘あらん、然ぞ有ぬ者よりは其有る物までも奪はれん。吾が敵にして我の己等に君臨するを欲せざる者等に至りては、之を茲に曳きたりて我が前に之を殺せ。」

此等の事を説き給ふや、イエスは先だちてエルサレムに上り給へり。

エルサレムに上り給ふ 約十一ノ五十五—

時にユダヤ人の逾越節近づきければ、身を潔めんが爲に、逾越節に先だちて郢地よりエルサレムに上る者夥だしかりき。是を以て彼等はイエスを尋ね、神殿に立て相互に語りけるは、「如何に思ふや？ 彼は果して該祝節に來らざる乎？」

祭司長等とパリサイ徒等は預て號令を與へて曰く、イエスの居る處を知る者あらば告ぐべしと、之を拏へんとせるなり。

ベタニヤに於ける宴筵 約十二ノ一八、可十四ノ

爰にイエスは逾越節の六日前ベタニアに至り給へり、即ちラザロの嘗て死にたるをイエスの復活らしたまひし處なり。彼處にてイエスの爲に晚餐を設くるあり、マルタ侍れり、ラザロはイエスと與に宴に即ける者の一なりき。時にマリアは貴き穂ナルドの香油一斤を取りて、イエスの足に塗り、其足を己が髪もて拭へり、香油の芳香家に満てり。

是に於て、其弟子の一人イスカリオテのユダ、即ちイエスを賣んとする者、云ひけるは、

「何ぞ此の香油を銀三百に鬻ぎて、貧き者に施さるやと？」

然し彼が是を言へるは貧き者を慮かれるに非ず、自ら竊盜なるに因り、又財囊を掌どりて其中に入りたる者を把る者なるに因りて也。

故にイエス言ひたまはく、「彼を容しおけ、吾が埋葬の日にまで之を存下しめよ。貧き者は常に汝等の中にあれども、我は常に在されば也。彼は其の能する限を爲なり、預じめ埋葬のた



めに吾が體に膏傅るなり。我まことに汝等に告ぐ、全世界中凡そ此の福音の宣傳へらるゝ處には彼が爲せる所の事も彼が紀念として稱へられん。」

爰にユダヤ人の大群衆はイエスの彼處に在るを知りて來れり、管にイエスの爲のみに非ず、又其が死者の中より復活らし給ひしラザロを見んとて來りし也。但し祭司長等はラザロをも亦殺さんと謀れり。是は彼の爲に衆多のユダヤ人往きて、イエスを信したるに因りてなり。

### 第六篇 最後の週

#### 第一章 櫻葉日曜日—凱旋の日

凱旋 入京 約十二ノ十二、可十一ノ一三、太廿一ノ四、五、可十一ノ四、七、太廿一ノ八、可十一ノ八、路十九ノ廿七、可十一ノ九、十、約十二ノ十六、十八、路十九ノ廿九、卅一、太廿一ノ十一、十二、約十二ノ十九、太廿一ノ十一、

翌日彼等橄欖山のベテパゲとベタニヤに至り、エルサレムに近づける時、イエス其弟子等の二人を遣はし、之に言たまはく、「汝等前面の村に往け、彼處に入らば、直に何人も未だ乗ざる繋げる小驢馬に遇はん、其を解きて引きたれ。若し誰かありて「汝等に何を爲すか？」と言はば、「主これを要す」と云へ、然らば直に之を此處に遣はさん。」

凡て斯の事の成れるは、預言者が言たることの成就せん爲なり、曰く、

「シオンの女に曰へ、

視よ、汝の王は



柔和にして、牝驢馬に乗り、  
鞭を負る者の子なる小驢馬に乗り、  
汝に來る。」

彼等往きて、門の前にて外に岐路に繋げる小驢馬に遇ひ、之を解けり。其處に立てる人々の中、或者かれらに曰ふ、「小驢馬を解きて何するぞと？」彼等イエスの己等に命じ給ひし如く言しかば、允せり。彼等すなはち小驢馬をイエスに引きたり、己等の衣を其上に鋪き、イエスを之に乗しめたり。

莫大の群衆おのれの衣服を道に鋪き、或者は原野より伐りたる枝を道に鋪けり。イエス今しも橄欖山の降阪に近づき給へるや、弟子たちの諸群歡喜にたへず、其既に觀たりし諸の奇蹟のために大聲に神を讚美し始めぬ。先に行き後に從がふ者呼はりて曰く、「ダビデの子にホザナ、主の名を以て來る者は祝せられ給へ、來る我等の父ダビデの國は祝せられよ、至上處にホザナ。」

此等の事を其弟子たちは初は曉らざりしが、イエス榮光を獲給へるに及びて後、此等の事が

イエスを指して録されたるを憶起し、且此を彼等がイエスに爲したるを曉りぬ。

イエスがラザロを墓より喚起し、之を死者の中より復活らせ給ひし時に、イエスと偕なりし群衆も證をなせり。斯の休徴をイエス爲し給ひたりと聞しかば、民群來りて彼を迎ふ。

パリサイ徒の數名群衆の中よりイエスに言けるは、「師よ、汝の弟子たちを叱りたまへ。」  
イエス彼等に言たまはく、「我なんぢらに告ぐ、斯輩もし黙せば、石叫ばん。」

イエス近づき給へるや、都城を望み、之がために泣きて、曰たまはく、「噫、此なんぢの日に於て汝また若し汝の安危に關はる事等を知たらば幸ならんに、今や此等の事なんぢの目に隠れたり。即ち日將に汝に臨まんすとす、其時には汝の敵はなんぢの周邊に壘を築き、汝を取圍みて、四方より汝に逼らん。而して汝と汝の内なる子女を地に打倒し、汝の内にては一の石をも石の上には遺さじ、汝その臨まるゝの時を知らざれば也。」

彼エルサレムに入り給ひしに、都中擧りて騒ぎ立て曰く、「彼は誰なるや？」

民ども言けるは、「彼はガリラヤのナザンよりせる預言者イエスなりと。」  
是に於てかパリサイ徒は互に相語るらく、「見すや、我等は何をも爲途る無し、視よ、世舉



りて彼の後に従へり。』

イエス エルサレムにて神殿に入り給ふや、徧く環視したまひけるが、時すでに晩景になりければ、十二人と共にベタニアへ出ゆき給へり。

### 第四章 月曜日―權威の日

無花果樹を誼ひ給ふ可十一ノ十二―十四

明る日彼等ベタニアより出し時、イエス飢給へり。葉茂き無花果樹を遙かに見て、庶は之に何か有らんとて其處へ到りしに、唯葉のみにして、外に何も之に見えざりき。無花果の期にあらざれば也。イエス應へて之に言たまはく、「何人も此後いつまでも汝の果を食ふこと絶て有されん。』

弟子等聞けり。

神殿を潔め給ふ可十一ノ十五―十七、太廿一ノ十四―十六、路十九ノ四十七、四十八、太廿一ノ十七

皆共にエルサレムに來りしが、イエス神殿に入り給ふや、神殿に在りて賣買する者どもを

逐いだし、兩替屋の臺案と、鳩を賣ぐ者の座几を倒し、器をもちて神殿を通るを何人にも許さず。彼等に説して曰たまはく、「吾が家は萬民の祈禱の家と稱られん」と録されたるに非ずや？ 然るに汝等は之を盜賊の巢窟となせり？」

替者、彼者神殿にて彼に近きければ、之を醫したまへり。然るに、祭司長等と學者等彼の成せし奇事を見、また童輩が「ダビデの子にホザナ」と曰て神殿に呼はるを見て、憤はり、乃ち彼に言けるは、「此等が言ふ所を聞かや？」

イエス彼等に言たまはく、「然り、汝等は未だ讀ざるか？ 爾は孩兒や哺兒の口に讚美を備へおけり」と録されき。』

祭司長等學者及び民の領袖等彼を斃さんと求めたれども、如何に彼を處置すべきかを知らざりき。民は皆イエスに耳を傾けて聽けり。

かくてイエス彼等を離れ、都城を出去てベタニアに往き、其處に宿り給へり。



### 第参章 火曜日—争闘の日

枯たる無花果樹の教訓 可十一ノ廿一

翌朝かれら過るとき、無花果樹の其の根より枯たるを見る。ペテロ憶ひ出て、イエスに申しけるは、「ラビ、視よ、汝の詛ひたまひし無花果樹枯たり。」

イエス答へて彼等に言たまはく、「神を信せよ。我まことに汝等に告ぐ、誰にても其心に疑ふ事なく、其の言ふ所何にても成るべしと信するならば、「此の山に抜けて海に飛こめ」と言ふとも必ず成らん。是故に我なんぢらに告ぐ、汝等その祈りて求むる所は何にても悉く獲べしと信せよ、然らば必ず獲られん。また汝等禱りに立る時、何人をか怨るあらば、之を宥せ、然らば天に在す汝等の父も汝等の罪をなんぢらに赦したまはん。」

キリストの權威に對しての尋問 路廿一、二、太廿一ノ廿四—

彼等またエルサレムに來れり。而して民衆は早朝よりイエスに聽かんとて神殿に居ける彼に集ひぬ。彼は神殿に於て民を教へ、福音を宣つゝありし時、祭司長等と學者等長老等と俱に

集り、イエスに問ふて言けるは、「請ふ我等に告げよ、汝は何の權を以て之を爲すや？又誰が斯の權を汝に與へしや？」

イエス答へて彼等に言たまはく、「我も一言汝等に問ん、若し我に之を告げば、我もまた何の權を以て之を行ふかを汝等に告げん。ヨハネの洗禮は何處よりぞ？天よりか、將人よりか？彼等心に慮かりて曰く、「若し」天より」と云は、何故なんぢら彼を信せざるか？といはん、若し「人より」と云は、民衆我等を石にて擧ん、皆ヨハネは預言者なりと確信すれば也と。」

是を以て彼等イエスに答へて曰ふ、「我等は知すこと？」  
イエスまた答へて彼等に言たまはく、「我も何の權を以て此等の事をなすかを汝等に告す。」

#### 三 警誠的警諭

二人の子 太廿一ノ廿八—

「汝等如何に思ふや？或人二人の子あり、長子に至りて曰ふ、「子よ、今日、我が葡萄園に操作に往け。」彼答へて「欲せず」といひしが、後悔て往けり。弟に至りて亦是の如く言ふに、彼答へて「家君、往く」と曰しが、竟に往ざりき。斯の二人の中孰か父の旨を成しや？」



彼等曰ふ、「長子なり。」

イエス彼等に言たまはく、「我まことに汝等に告ぐ、税務官や娼妓は汝等よりも先に神の國に入らん。そはヨハネ義の道を以て汝等に臨みしに、汝等は彼を信せず、税務官や娼妓は却て彼を信じたり。然るに汝等は之を視ながら後にも彼を信するやう悔改めざりき。」

悪しき農夫 太廿一ノ卅三—  
四十六、

「又一の譬喩を聴け、茲に家父あり、葡萄園を植る、之に籬を環らし、其中に酒搾をほり、且塔を建て、之を農夫等に貸して他國へ旅行せり。果期近づきぬれば彼その果を受取しめんとて己の僕等を農夫等に遣はせしに、農夫等かれが僕等を擧へて、一人を毆ち、一人を殺し、一人を石にて撃殺せり。また他の僕等を先よりも多く遣はせしに、之にも同く然なせり。是に於て彼終に己の子を彼等に遣せり、謂らく、「吾が子をは畏敬ふならん」と。農夫等子を見るや、心裏に謂らく、「彼は嗣子なり、來れ、彼を殺さん、然らば我等その田園を取るを得ん」と。乃ち彼を拘へ、葡萄園より押出して殺したり。斯れば葡萄園の主來らん時、此の農夫等を如何に處置せんか？」  
彼等イエスに曰ふ、「此等の悪者どもを甚く討滅し、時節に果を己に納むる他の農夫等に其

の葡萄園を貸ん。」

イエス彼等に言たまはく、「汝等いまだ聖書に讀ざるか？」

「工匠等の棄たる石は、

是即ち隅の首石と成れり、

斯れ主の成たまへる事にて、

我等の目には奇し」

故に我なんぢらに告ぐ、神の國は汝等より取れ、其の果を結ぶ民に與へらるべし。凡そ斯石の上に墮る者は壞れん、また誰の上にも隕れば之を碎かん。」

祭司長等とパリサイ徒等彼の譬喩を聴くや、其が己らを指て言る者なるを曉り、彼を捉へんと謀りしが、群衆を懼れたり、彼を預言者と認められたれば也。

王子の結婚 太廿二ノ一—  
十四、

イエス答へて、復譬喩もて彼等に語りて、曰給はく、「天國は王その子の爲に婚筵を開くが如し、彼婚筵に招きたりし人々を召しめんとて、其の僕等を遣はしけれど、彼等來るを肯せず。



復他の僕等を遣はして曰く、招きたる人々に言へ、「視よ、我すでに吾が饗宴を備ふ、吾が牛と肥たる畜宰られて悉く具れり、請ふ婚筵に來れど。」然るに彼等顧みず、一人は其田畑に、一人は其商業に往き、其餘は僕等を執へ、太く凌辱めて殺せり。王聞て怒り、己の軍勢を遣はして其兇徒を亡ぼし、且其邑を焼けり。時に王その僕等に言けらく、「婚筵すでに具備れども、招きおける者等は客たるに堪ず、ゆるに通衢に往きて、凡そ遇ふ者を婚筵に呼きたれ。」その僕等すなはち途々に出て、其の遇ふ者を善も悪も悉く集めれば、婚筵は客にて満てり。王乃ち客を觀んとて入來りしに、其處に一人婚禮の服を着ざる者あるを見、彼に言けるは、「友よ、何ぞ婚禮の服を着ずして茲に入りしや？」彼默然たり。王やがて役丁等に曰ふ、「彼の手足を縛りて之を外の幽暗に投よ、其處にて哭くこと及び切齒すること有ん。」召るゝ者は多けれど、選まるゝ者は少なければ也。」

イエスに對する三挑戰的質問

カイザルへの貢賦 太廿二ノ十五、路廿ノ廿、太廿二ノ十六、廿二

この時パリサイ徒等去りてイエスを官府に總督の權柄に交附すを得るやう如何に彼を其の

言によりて陷るれんかと相謀り、己の弟子たちをヘロデ黨員とともに彼に遣はして、言しむらく、「師よ、我等知る汝は誠實なる者なり、眞實を以て神の道を誨ふ、且汝は誰をも憚らず、人の狀貌を問はざれば也。されば汝如何に思ふや？我等に告よ。カイザルに貢賦を納むるは可や否や？」

イエス彼等の惡計を識て、曰たまはく、「偽善者よ、何ぞ我を試むるや？貢賦の貨幣を我に見せよ。」彼等デナリ一枚をイエスに携來りしに、イエス彼等に言給はく、「斯の像と銘は誰のなるや？」

彼に云ふ、「カイザルなり。」

イエス乃ち彼等に言たまはく、「然らばカイザルの物はカイザルに歸し、神の物は神に歸せ。」

彼等聞て奇とし、イエスを離れて去りぬ。

復活の質問 路二十三、廿七、廿八、廿九、三十

復活する事を否むサドカイ徒若干進みて、イエスに問ふて、言けるは、「師よ、モーセ我等



に書示すらく、人の兄弟妻を有て死し、子等を遺さずば、其兄弟たる者之を妻に娶りて、其兄弟に後嗣を得さすべしと。されば、茲に兄弟七人あり、兄妻を娶り、子等なくして死たれば、其次これを娶りしに、又も子なくして死ねり、其三も之を娶り、七人みな斯く爲せしが、胤を遺さずして死し、最後に婦もまた死ねり、されば復生の際に彼女は其中の誰が妻とならんか？ 是は七人彼を妻に有たれば也。』

イエス彼等に言たまはく、『汝等は聖書をも神の全能をも識ざるが故に謬れり。此世の子等は娶り嫁ぐ、然かれども彼の世に入り、死者の中より復活へるに堪るとせらるゝ者等は嫁ぐこと無く、又娶ることなし、彼等は復死すべからず、聖使等に均しかるべし、既に復活の子なれば、神の子たるなり。死者復活へると云ふことをば、モーセ荆棘の篇にて、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と稱へて之を示せり。神は死たる者の神に非ず、活る者の神なり。如何となれば皆神に活れば也。』

群衆聞て其の訓を奇とせり。

大誠律 可十二ノ廿八―三十四

學者の一人彼等の相論するを聞き、又イエスが彼等に善く答へ給ひたるを見、進みて彼に問けるは、『諸誠中の第一なる者は孰れぞや？』

イエス彼に答へ給ひけるは、『諸誠中の第一なる者は、イスラエルよ聴け、主なる汝の神は唯一の神なり、汝の心を盡し、汝の霊を盡し、汝の意を盡し、汝の力を盡して、主なる汝の神を愛すべし。』第二も之に同じ、汝の近隣者を己の如く愛すべし。』此等より大なる誠律は他に無し。』

學者彼に言ふ、『善い哉、師よ、汝が言しは眞なり、如何にも神は唯一にして、其外に他の神なし、されば、心を盡し、意を盡し、霊を盡し、力を盡して愛し奉り、且近隣者を己の如く愛するは寔に燔祭や犠牲よりも大なるなり。』

イエス彼が智く答へしを見て、彼に言たまはく、『汝は神の國に遠からずと。』

答へ能はざるイエスの質問 可十二ノ廿七―四十六

パリサイ徒集りければ、イエス之に問ふて、曰給はく、『汝等はキリストを如何に思ふや？ 誰の子なるか？』



彼等イエスに曰けるは、『ダビデの子なり。』

イエス彼等に言たまはく、『然らば何をダビデ聖霊に藉りて彼を主と稱へたるや？曰く、

「主わが主に言らく、

我なんぢの敵輩を汝の承足となすまで

吾が右に坐せよと？」

されば、ダビデ若し彼を主と稱へたらば、彼いかに其子ならんや？』

誰ありて一言もイエスに應ふる能はず、此日より復敢て彼に問ふ者なかりき。

大群衆欣びて彼に聴けり。

學者等とパリサイ徒に對してのイエスの談論 太二十三ノ一—三十九

爾時イエス群衆と弟子たちに語りて、曰たまはく、『學者等とパリサイ徒はモーセの座に坐せり。故に凡て彼等が汝等に言ふ所を守り且行へ、然るに彼等の所爲に倣ふて行ふ勿れ、彼等は言て行はざれば也。抑も彼等は負がたき重荷を束括て人の肩に載れど、己は一本の指にてすらも之を動すを欲せず、彼等の所爲は凡て人に見られん爲に爲すなり。即ち彼等は其の經牌を闊

くし、其邊縁を大きくし、また宴席にては上座を、會堂にては上座を、街衢にては敬禮を好み、又人々よりは「ラビ」と稱へらるゝを好む。されど汝等は「ラビ」と稱へらるゝ勿れ、汝等の師は一人のみ、汝等はみな兄弟なればなり。また汝等は地上に於る者を誰も汝等の父と稱ふる勿れ、汝等の父は獨一にして天に在せばなり。また汝等は師は一人にて、即ちキリストなり。汝等の中にて大なる者は汝等の役者となるべし。如何となれば、自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせらるべければ也。

「偽善なる學者及びパリサイ徒よ、嗟なんぢらは禍なる哉！汝等は人々の前に天國を閉て、己も入らず、また入んとしつゝある者の入るをも允さざれば也。

「偽善なる學者およびパリサイ徒よ、嗟汝等は禍する哉！汝等は一人の信者を作んとて海陸を歴巡り、既に作成るや、之を汝等よりも倍する地獄の子とすればなり。

「譬なる相者よ、嗟汝等は禍なる哉、汝等は言ふ、「凡そ人神殿を指して誓は、虚し、神殿の黄金を指して誓は、還さざる可らずと。」愚にして誓なる者よ、金か、金を聖からしむる神殿か、孰れ大なるぞ？、又云ふ、「凡そ人祭壇を指して誓は、虚し、其上に在る献物を指して誓は、還



さる可らずと。嗟嗟よ、献物か、献物を聖からしむる祭壇か、孰れ大なるぞ？抑も祭壇を指して誓ふ者は、祭壇と凡て其上に在る者を指して誓ふなり。凡そ神殿を指して誓ふ者は、神殿と其中に住む者を指して誓ふなり。天を指して誓ふ者は、神の御座と其上に坐する者を指して誓ふなり。

「偽善なる學者およびパリサイ徒よ、嗟汝等は禍なる哉！汝等は薄荷、茴香、馬芹の十分の一を納じれども、律法の尤も重き義と仁と信を遣せり、此等は須らく爲すべし、彼等も怠るべからず。誓なる相者よ、蜻蛉を瀦出せど、却て駱駝を呑むなり。

「偽善なる學者およびパリサイ徒よ、嗟汝等は禍なる哉！なんぢらは杯と盤の外部を淨むれど、汝等の内部には貪慾と不潔充滿り。嗟嗟なるパリサイ徒よ、先づ杯と盤の内部を淨めよ、然らば外部も淨くなるべし。

「偽善なる學者およびパリサイ徒よ、嗟汝等は禍なる哉！汝等は白く塗たる壁に似たり、其外部は人に美しく見ゆれども、内は死者の骨と諸の汚穢にて充てり。斯の如く汝等も外は人に美しく見ゆれども、内は偽善と不義にて充り。

「偽善なる學者およびパリサイ徒よ、汝等は禍なる哉！汝等は預言者の墓を建て、義き人の碑を飾りて、曰く「我等も先祖の日にありしならば、預言者の血に與せざりしならん」と。斯れば汝等は預言者等を殺せし者の裔なることを自ら證明するなり。汝等は先祖の量を盈せ。吁嗟嗟よ、蝮の裔よ、汝等いかで地獄の刑罰を通れんや？故に、視よ、我なんぢらに預言者、智者、學者を遣はす、其中の或者を汝等は殺し且十字架に釘けん、或者を汝等の會堂にて鞭ち、且邑より邑へ追迫めん。是れ義人アベルの血より、汝等が神殿と祭壇の間に殺せしバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、凡て地の上に流されたる義き血、汝等の上に歸せんが爲なり。我まことに汝等に告ぐ、此等の者は皆此の民族の上に歸すべし。

「噫エルサレムよ、エルサレムよ、預言者を殺し、且汝へ遣はされたる者を石にて擊殺す者よ！牝雞の其雛を翼の下に集むることく、我なんぢの赤子を集んと欲せしこと幾次ぞや、然るに、汝は肯せざりき。視よ、汝等の家は墟址となりて汝等に遺らん。我なんぢらに告ぐ、「主の名を以て來る者は祝せられ給へ」と汝等の言ふまで、今より汝等は我を見ざるべし。」

寡婦の二のレンタ 可十二ノ四十一—



イエス賽銭箱にむかひて坐し、群衆の錢を賽銭箱に投ぐるを見たまひしに、許多の富者は多く投たり。時に一個の貧き寡婦來りしが、レブタ二つを入れたり、此は五厘にあたる。イエスその弟子等を召よせて、之に言たまはく、「我まことに汝等に告ぐ、此の貧き寡婦は賽銭箱に入たる孰れの人よりも多く入れたり。如何となれば彼等は皆其餘れる中より入しかども、彼女はその乏き中より、有る限り、活計の費を竭して入れたれば也。」

異邦人イエスを求む 約二十二、二十一

該祝節に禮拜せんとて上れる者の中に若干の異邦人ありき。是を以て是等の者ガリラヤのベテサイダよりせるピリポに來りて、之に乞ふて、曰く、「君よ、我等はイエスに見えんことを欲す。」

ピリポ來りてアンデレに告げ、アンデレとピリポもまたイエスに告ぐ。

イエス彼等に答へて、曰給はく、「人の子榮耀せらるべき時は來れり。誠に誠に我なんぢらに告ぐ、麥の粒若し地に墜て死せずば、惟一にて留まる而已、然ども若し死せば、衆多の實を結ぶべし。其生命を愛する者は之を失ふべし、此世にて其の生命を惡む者は之を保ちて永生に

至るべし。人若し我に事ふるならば、須らく我に従ふべし、我が在る處には我に事ふる者も亦其處に在るべし。人若し我に事ふるならば、我が父これを尊ぶべし。今や吾が心は痛く憂ふ、何を言んか？父よ、我を救ひて斯の時を免れしめたまへ。否な、我は之が爲にこそ斯の時に至れるなれ。父よ、汝の名を榮しめたまへ。」

時に天より聲來りて曰く、「我は既に之を榮耀したり、復これを榮耀せん。」

是に於てか其處に立て聞ける群衆は言へり、雷鳴れりと、或人々は言へらく、「聖使彼に言ひたるなりと。」

イエス答へて言給はく、「此聲は我の爲にして來れるに非ず、汝等の爲なり。今や世の審判は成る、今や此世の君は逐出されんとす。我若し地より擧られれば、一切を我に率ん。」

イエスが此を言給へるは其如何なる死を以て死せんとするかを示せる耳。

群衆イエスに答ふるは、「キリストは永遠に住すと我等は律法中より聞たるに、汝は何ぞ人の子擧らるべしと」言ふや？斯の人の子は誰ぞや？」

因てイエス彼等に言たまはく、「尙暫時は光なんぢらの中に在り、汝等光を有する間に歩け、



暗をして汝等に追及しむる勿れ、暗に歩く者は何處へ往くかを自ら知らざる也。汝等は光を有する間に光を信せよ、然らば光の子となるを得ん。

イエス此を言ひ了り給ふや、去りて、彼等に身を匿したまへり。

ユダヤ人イエスを拒絶す 約十二ノ三十七

イエス彼等の前に然か多くの休徴を爲したまひしかども、彼等はイエスを信せざりき。是れ預言者イザヤが説し言の成就せん爲なりとす、彼曰く、

「主よ、誰か我等に聞て信せしぞや？」

主の腕は誰に向ひて示されしぞやと？」

されば彼等の信する能はざりしことをイザヤは重て説きて、云く、

「神彼等の目を瞶くし、彼等の心を頑にし、彼等をして其目を以て見ざらしめ、其心を以て曉らざらしめ、

其の改めて、

我の之を醫す無らしむ。」

イザヤは彼れの榮光を見、彼の説ける時に、此等の事を言へり。但し領袖の中にも亦イエスを信じたる者多かりき、然れどもパリサイ徒の故に因りて公言せざりしは、會堂より逐出されざらん爲なりき。如何となれば、彼等は神の榮光よりも人の榮光を愛したれば也。イエスは酒ち呼はりて、言ひたまはく、「我を信する者は我を信するに非ず、我を遣はしたまへる者を信するなり。また我を見る者は、我を遣はし給へる者を見る也。我は光として世に來れり、然れば凡て我を信する者をば暗に留らざらしめん。人若し吾が言を聽て、之を守らずとも、我は之を審判かず、如何となれば、我は世を審判かん爲に來れるに非ず、世を救はん爲に來れば也。我を藐んじて吾が言を納れざる者をば之を審判く者あり、我が宣たる言、是すなはち末の日に於て彼を審判かん。如何となれば、我は自ら壇まに言へるに非ず、我が何を言ふべきか、何を説くべきかに至りては、我を遣はせる父親ら我に命令を授けたまへるなり。其の命令は即ち永生なるを我は知り。故に我が説く所は、父の我に告たまひし如く、然か説くなり。」

未來に關する談論 太二十四ノ二、三、可十三ノ三十一、路廿一ノ十六、十七、太廿四ノ十三、  
三、路廿一ノ二十二、可十三ノ十七、廿三、太十四ノ廿六、廿七、可十三  
ノ廿七、三十三、太廿四ノ三十五、三十六、路廿二ノ卅四、卅六、太廿四ノ廿七、  
四十四、可十三ノ卅三、卅七、太廿四ノ四十五、五十一



イエス神殿を出て去りしに、其弟子たち進み寄て彼に神殿の結構を見せんとす。

イエス答へて彼等に言給はく、「汝等此等の者を皆見るや？我まことに汝等に告ぐ、此には一の石も崩れずして、石の上に造らじ。」

イエス橄欖山にて神殿に向ひて坐し給へる時、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレに彼に問けるは、「何時此等の事あるや？此等の事みな成んとする時には先如何なる兆あるや？我等に告たまへ。」

イエス答へて彼等に言たまひけらく、「慎みて人に惑はるゝ勿れ。多くの人吾が名を冒し來り、「我なり」と曰て多くの人を惑はさんとすれば也。なんぢら戦争や戦争の流傳を聞く時、あへて懼るゝ勿れ、此等の事は必ず有るべければ也、されど終末は未だし。即ち民は民に、國は國に起ち逆らひ、地震や饑饉處々に有らん、此等は苦難の始なり。

「汝等みづから慎め、人々なんぢらを議會に交付さん、而して汝等は會堂にて鞭たれ、又わが爲に方伯や王侯の前に立て彼等に證とならんとす。福音は先づ萬國民に宣傳へすんは有るべからず。人々汝等を曳ゆきて解さん時、汝等は何を言んかと預じめ慮る勿れ、唯その時に汝

等に賜はる所の事を言へ、是は言ふ者は汝等にあらす、聖靈なれば也。また汝等はその親に、兄弟に、親族に、朋友に訴へらるゝあらん、否、なんぢらの中彼等の爲に殺さるゝ者もあるべし。汝等は吾が名の爲に一切の人に憎まれん。

「斯の時衆多の人々蹟かん、而して彼等互に相賣り、互に相惡まん。また僞預言者多く起りて、衆多の人を惑はさん。不義の盈るに因て、衆多の人の愛心冷淡にならん。されど終まで耐忍ぶ者は救はれん。

「汝等エルサレムが軍隊に取圍まるゝを見なば、其時には知れ之が滅亡運きに在りと。其時にはユダヤに居る者は山に通れよ、市内に在る者は外に出でよ、地方に處る者は之に入る勿れ。此は即ち是れ刑罰の日たるなり、凡て録されたる所の者は是に於てか成就せんとす。

「其日には懷孕する者と乳を哺する者は、禍なる哉！其が冬に於てせざらんやう禱れ。夫の時には神が萬有を創造したまへる創造の初より今に至るまで未だ曾て有らず又後にも有ざらん程の艱難あらん。主もし其日を滅したまはずば、軀の救はるゝ者なからん、されど主は其選べる受選者のために夫の日を滅したまへり。其時もし誰か汝等に「視よ、キリスト此にあり、視よ、彼



處にあり」と言ふとも、信する勿れ。偽キリスト、及び偽預言者起りて、休徴と異能を行ひ、若能すべくば選ばれたる人々をすらも終に惑感すべければ也。故に汝等慎め、視よ、我預じめ悉く汝等に告たり。若なんぢらに告て「視よ、キリスト野に在り」と言ふとも、出る勿れ、「視よ、室に在り」と言ふとも、信する勿れ。それは電火の東より出て西にまで光る如く、人の子の來るも亦是のごとくならんすれば也。屍體の在る處には驚其處に集らん。

「此等の日の艱難の後、直に日は晦み、月は其の光明を與へず、星は天空より隕ち、天上の權能も震搖されん。時に人の子の號標天空に現はれん。その時地の諸族は哭かん、而して人の子が大なる權能と威光を以て天空の雲に乗て來るを見ん。時に彼その使等を遣はしつ、地の極より天の極まで、四風より其選ばれたる者を蒐集めしめん。

「汝等無花果樹より譬喩を學べ、其枝はや柔きて、葉の芽む時は、汝等夏の近きを知る、斯の如く、汝等此等の事の成るを觀る時は、其すでに近く門に至るを知れ。我まことに汝等に告ぐ、此等の事の皆成るまでは、此の民族廢らじ。天地は廢らん、然と吾が言は廢らじ、其の日また其の時を知る者は獨父のみ、天使たちも子も誰も知る者なし。

「されば汝等慎めよ、恐くは汝等の心醉酺と酺酺と今生の苦慮とに専らなるあらん、而して夫の日俄に汝等に臨まん、是れ全地の面に凡て居る者の上に網の如く臨むべければ也。されば汝等醒寤て、一切の時に祈禱れ、庶幾くは將に來らんとする此等の事等を盡く逃れて、人の子の前に立つに堪る者とせられん。

「ノアの日に於ける如く、人の子の來るも亦然らん。即ち洪水の先の日に於ける如く、ノアの方船に入る其日までは、人々飲み食ひ、娶り嫁ぎしてをり、洪水の來りて悉く呑み去るまで知ざりき、人の子の來るも亦斯の如くなるべし。時に二人畑に在んに、一人は取れ、一人は遺されん。二人の婦磨をひき居らんに、一人は取れ、一人は遺されん。汝等の主何れの時に來るかを知れば、汝等醒寤よ。

「汝等また之を知れ、家父若し盜賊の何れの時に來るを知らば、警醒て其家を穿たしめじ。是故に汝等も備せよ、汝等の知ぬ時に人の子來るべければ也。

「されば汝等慎み且醒寤て禱れ、其時は何時なるを知られば也。是は人他國へ旅行せんとして、僕等に各々其の職務を成すの權を授け、且關人に醒めをれと命じて、家を去れるが如し。



是故に汝等醒服をれ、其家の主何時来るか、夕暮なるか夜半なるか鶏鳴時か朝なるかを汝等知ざれば也、恐くは彼遽に來りて汝等の寢たるを視ん。我が汝等に告るは亦これ一切の人に告るなり、曰く醒寤をれ。

「主人が其眷屬の上に立て、時を按て糧を彼等に與へしむる忠かつ智なる僕は誰なるや？其の主人の來る時斯く行ひつゝあるを觀らるゝ僕は福なる哉。我まことに汝等に告ぐ、主人これに其一切の所有を幸せらしめん。されど若彼の惡き僕、吾が主人の來るは遅しと己が心に謂ひ、其の同僕を毆始め、酒徒と偕に飲み食はんには、其の僕の主人彼が意はざる日、彼が識ざる時に來りて、之を斷ち、其の報を偽善者と與ならしめん、彼處にて哭くこと及び切齒すること有らん。」

弟子等に對しての三教訓

十人の處女の譬喩 太三十五ノ一

「厥時天國は十人の處女が其の燈火を執て、新郎を迎へに出たる如くならん。其中五人は愚にて、五人は賢し。愚なる五人は燈火を携へたれども、油を身に帶ず、賢き者は燈火と偕に油

タレントの譬喩 太廿五ノ十四

を器に帶り。新郎通りければ、皆假寐して寢れり。夜半に呼はりて、「視よ、新郎來る、出て之を迎へよ」と云ふありければ、夫の處女等皆起きて、其の燈火を整へけるが、愚なる者やがて賢き者に言ふ、「汝等の油を我等に分與へよ。我等の燈火滅ゆと。」賢き者答へて曰く、「恐く我等と汝等とは是れ、寧ろ賣る者にゆきて自ら買へ。」

「彼等買んとて往ける間に、新郎來りければ、既に備たる者は彼どもに婚筵に入り、門は閉されたり。最後に其餘の處女等來りて曰く、「主よ、主よ、我等に啓きたまへ。」彼答へて曰ふ、「我まことに汝等に告ぐ、我汝等を識すこと。」

「されば警醒よ、汝等は其日をも其時をも知ざれば也。」

「抑も人他國へ旅行んとして其の僕等を召びつ、所有を彼等に托するが如し。各々その伎倆に應じて、或者には五タレント、或者には二タレント、或者には一タレントを委ねて、直に旅行り、五タレントを受し者は往て、之を以て商賣しつ、外に五タレントを贏け獲たり、二タレントを受し者も同く外に二タレントを贏け得たり、唯一タレントを受し者は、往て地に穴掘り、



主人の金を藏せり。

「久しくして後、斯の僕ごもの主人歸りて、彼等と計算をなせしが、五タレントを受し者進みつ、別に五タレントを献じて曰く、「主、汝は我に五タレントを委ねたまひしが、視よ、我別にまた五タレントを贏け獲たり。」其の主人彼に言けるは、「善哉、善且忠なる僕よ、汝は僅少の物に忠なりしかば、我なんちをして夥多の物を幸ごらしめん、汝の主人の喜悦に入れ。」

「二タレントを受し者も進みて曰ふ、「主、汝は我れに二タレントを委ねたまひしが、視よ、我別にまた二タレントを贏け獲たり。」

「其の主人彼に言けるは、「善哉、善且忠なる僕よ、汝は僅少の物に忠なりしかば、我なんちをして夥多の物を幸ごらしめん、汝の主人の喜悦に入れ。」

「一タレントを受し者も進みて曰ふ、「主、我なんちは苛酷人にして、播ざる處より穫り、撒ざる處より聚むるを知りたれば、我懼れて往き、汝のタレントを地に藏せり、視よ、汝の貨を汝獲たり。」

「其の主人答へて、彼に言けるは、「悪く且怠れる僕よ、汝わが播ざる處より穫り、撒さる

處より聚むるを知たれば、宜しく吾が金を銀行家に預け置べかりし、然らば我來りて利と借に吾が貨をも受とるを得たらん。故に彼より其タレントを取て、十タレントを有る者に與へよ。凡て有る者は與へられて餘あらん、然と有ぬ者は其有りと思はる、物までも取れん。無益なる僕を外の暗冥に投よ、彼處にて哭こと及び切齒すること有ん。」

審判の場 況 太二十五ノ卅一—四十六

「人の子は己の威光を以て諸の天使と偕に來るとき、其の威光の座に坐したまはん、而して萬民その前に集まるや、牧者が羊と山羊を別つごとく彼等を相わかち、羊を其の右に、山羊を其の左に置かん。時に王その右に在る者に言はん、「吾が父に祝せらるゝ者よ、來りて世の創始より汝等の爲に備へられたる國を獲よ。そは我飢しに汝等我に食せ、我渴しに汝等我に飲せ、我旅せしに汝等我を宿せ、我裸なりしに汝等我に衣せ、我病しに汝等我を訪ひ、我監獄にありしに汝等我に來りたれば也。」

「此の時義き人彼に答へて曰ん、「主よ、我等何時汝の飢しを見て汝に食せしや？或は渴きしを見て汝に飲せしや？何時汝の旅せしを見て汝を宿らせしや？或は裸なるを見て汝に衣せしや



「また何時汝の病み或は監獄に在しを見て汝に至りしや？」王答へて彼等に曰はん、「我まことに汝等に告ぐ、汝等吾が此至微き兄弟の一人に行ひし時は、即ち是れ我に行ひし也。」

「斯て左に在る者にも言はん、」詛る、者よ、我を離れて退け、悪魔と其の使衆の爲に備へられたる永遠の火に入れよ。そは我飢しに汝等我に食せず、渴きしに汝等我に飲せず、旅せしに汝等我を宿らせず、裸なりしに汝等我に衣せず、病み又監獄に在りしに汝等我を訪はざりければ也。其時かれらも答へて王に曰ん、「主よ、何時われら汝の飢る、或は渴き、或は旅し、或は裸なる、或は病る、或は監獄に在るを見て、汝に事へざりしや？」王乃ち彼等に答へて曰ん、「我まことに汝等に告ぐ、汝等此の至微き者の一人に行はざりし時は、即ち是れ我にも行はざりし也。」彼等は永遠の苦に入り、義き人は永遠の生命に入らん。」

イエスに對抗する同盟 太二十六ノ一—五、  
路廿二ノ三—六

イエス此等の言を悉く語り畢り給ふや、其弟子たちに言たまはく、「汝等は知る、二日の後は逾越節にして、人の子は十字架に釘られん爲に交付るべし。」

是時祭司長等および民の長老等、カヤバと云ふ祭司長の中庭に集まり、詭策もてイエスを

第四章 水曜日—幽居の日

擧へ殺さんと相議りて、云らく「節日には爲すべからず、恐くは民の中にて亂おこらんと。」時に十二の一人にて又の名をイスカリオテといふユダにサタンみいれり。是に於て彼往つ祭司長等および評議官等と俱に議し、如何にイエスを彼等に賣らんかと相謀れり。彼等乃ち喜びて、彼に金子を予へんと契約す。ユダ承諾ひつ、群衆の居らざるに乗じてイエスを交附さんと機を窺へり。

(此日に於ける事件に就ての記録はなし。イエスはベタニヤの友人等の家にて殆んど疑なく幽居に於て費し給へり。)

第五章 木曜日—交友の日

逾越節の準備 可十四ノ十二—十四、太廿六ノ十八、  
可十四ノ十四—十六

無酵麴餅節の首の日、逾越の羔羊を屠る時弟子たちイエスに言けるは、「我等をして何處に



「逾越の食を汝のために備へしめん」と欲したまふや？」

イエス其の弟子等の二人を遣はし、之に言たまはく、「京城に行け、水瓶を肩にする人に汝等遇ん、然らば之が後に從ひ行け、而して彼が入れる家の主に言へ、「師云ふ、吾が期近づけり。我が弟子と偕に逾越を食ふべき吾が宴室は何處に在るやと？」彼既に整へたる大なる食堂を汝等に見せん、其處にて我等のために備へよ。」

其弟子たち京城に來り、イエスの己等に言給ひし如く遇しかば、則ち逾越を備へたり。

弟子等の間の競争 可十四ノ十七、路廿二ノ

日暮し時、イエスその十二人と偕に來り給へり。彼等の中には亦その孰が大なるべきかとの争論おこりければ、イエス乃ち彼等に諭したまはく、「異邦人の王侯は人々に主となる、又其の上に權を乗る者は恩主と稱へらる、されど汝等は然るべからず、却て汝等の中に大なる者は小なる者の如く成れ、首領たる者は役者の如く成れ。抑も宴する者と給事する者は、孰が大なるや？宴する者ならずや？然れども我は汝等の中に於るや給事する者の如くす。汝等は我と偕に吾が試煉を歴きたれる者なり、されば吾が父の我に備へ設けたまへる如く、我も汝等のために

一つの國を備設けん。是は汝等をして吾が國にて吾が桌上に食ひ且飲しめん爲、また寶座に坐してイスラエルの十二族を審かしめん爲なり。」

イエス弟子等の足を洗ひ給ふ 約十三ノ一

逾越節の日の前、イエスは既に己が斯世を去り、父に歸るべき時の來れるを知りたまへり。世に於ける己の弟子をば、從より之を愛し、終に至るまで之を愛したまひき。

晚餐方に成れる時、悪魔すでに師を賣るの意をシモンの子イスカリオテのユダが心に入れてありしかば、イエスは早くも父が一切を己の手に授けたまひしと、己が神より來りて神に往くことを知りて、晚餐の席より起あがりつ、其表衣を脱ぎ、幌巾を取りて自ら帶し、斯くて水を盥に盛り、其弟子等の足を濯ひ始め、其滯たる幌巾もて之を拭ひ給へり。

乃ちシモン・ペテロに臨むに、ペテロ イエスに白しけるは、「主、吾が足を濯ひたまふ乎？」

イエス答へて彼に言ひたまはく、「我が爲す所の者を汝今は知らず、然れども後には知るべし。」



ペテロ イエスに言けるは、「決して吾が足を濯ひたまふ可らず。」

イエス彼に答へたまひけるは、「我若し汝を濯はすば、汝は我に分ある無けん。」

シモン・ペテロ イエスに言けるは、「主よ、番に吾が足のみならず、また吾が手と頭をも

濯ひたまへ。」

イエス彼に言ひたまはく、「既に濯はれたる者は惟足を濯ふを要する而已、されども身全く  
淨きなり。汝等は淨し、然れども皆には非ず。これイエスは己を賣ん者は誰なるを知りたまひ  
しが故なり。是を以て『汝等は皆淨きには非ず』と言ひたまひし耳。」

イエス彼等の足を濯ひ畢り、其の表衣を取りて後、復寢に即きて、彼等に言たまはく、「我  
が汝等に爲したる所の何たるを汝等知るや？ 汝等は我を師また主と呼ぶ、汝等の然か言ふは宜  
し、我は眞に是なり。我は主たり又師たるに、猶なんぢらの足を濯ひたらば、汝等も亦須らく  
互に足を相濯ふべし。我模範を汝等に示したるは、我が汝等に爲したる如く、汝等にも亦爲さ  
しめんが爲なり。誠に誠に我なんぢらに告ぐ、僕は其主よりも大ならず、亦使者は其の之を遣  
はせる者よりも大ならず也。汝等若し之を知り、若し之を行はば、福なるべし。」

「我は汝等を悉く指して言ふに非ず、我は我が選びたる者等の人と爲を知る、然し乍ら我と  
併に麩餅を食ふ者我にむかひて其體を擧ぐべしと録せる聖書は成就せずんば有るべからず。今  
我其の成らざるに先だちて汝等に告ぐ、是は其の成りたらん時に汝等をして我の其なるを信せ  
しめん爲なり。誠に誠に我なんぢらに告ぐ、我が遣はしたらん者を接くる者は我を接くる也、  
我を接くる者は我を遣はし給へる者を接くる也。」

内應者指摘さる 約十三ノ廿一、廿二、廿六ノ廿二—  
廿五、約十三ノ廿三—廿二

イエス此を言ひ了り給ひし時、心に憂へ、證して、宣はく、「誠に誠に我なんぢらに告ぐ、  
汝等の中一人は我を賣ん。」

是故に弟子たちは其は誰を指して言ひたまひしかと疑ひて、互に面を見あはしたり。彼等  
はなはだ憂へ、各言はじむらく、「主よ、我なるかど？」 イエス應へて曰給はく、「我と併に手を  
盃に下す者、彼すなはち我を賣ん。夫人の子は其の己に關りて録されたる如く近ん、されども  
人の子を賣る者は禍なる哉！ 斯人や若し生れずば、却て己が爲に善りつらん。」  
彼を賣るユダ言らく、「ラビ、我なるか？」







職命を我は汝等に與ふ、曰く、汝等互に相愛すべし、我が汝等を愛せし如く、汝等も互に相愛すべし。汝等若し互に相愛するの心を懐かば、昔是に由て汝等が我の弟子たることを認めん。」

シモン・ペテロ イエスに白しけらく、「主よ、何處へ往きたまふや？」

イエス答へたまはく、「我が往く處へは汝今は我に従がふ能はず、然る後には従がはん。」

時にイエス彼等に言給ひけるは、「今夜なんちら咸我に躓かん、我牧者を撃ち、羊散んと録されれば也。我復活後、汝等より先にガリラヤに往ん。」

ペテロ彼に言けらく、「假令皆なんちに躓くとも、我は然らず。」

イエス彼に言たまはく、「我まことに汝に告ぐ、今日此の夜の中雞の二次鳴く前なんち必ず三次我を否まん。シモンよ、シモンよ、視よ、サタン汝等を麥のごとく篩はんとて汝等を求めたり、然れども汝が信仰の匱ざるやう我なんちの爲に騰れり。汝一たび自ら改むるや、汝の兄弟等を堅固うせよ。」

彼いよく強く言ふ、「假令我なんちと借に死するとも汝を否まじと。」皆同じく然いへり。

斯てイエス彼等に言給はく、「我財布も囊も履も無しに汝等を遣はせし時、なんちらには何

か事缺たる事ありしや？」

彼等言けるは、「無し。」

是に於てイエス彼等に言たまひけらく、「併し今は財布ある者は、之を取れ、囊も然れよ、無き者は衣服を賣りて劍を買へ。寔に我なんちらに告ぐ、「彼は罪人と與に算へらる」と書されたる所は我に在て尙成就せずんば有べからず、如何となれば、我を指たる所の事等は終に遂へべき者なれば也。」

彼等言けるは、「主、視たまへ、此に二口の劍あり。」イエス彼等に言たまひけるは、「足れり。」

「汝等の心をして憂へしむる勿れ、汝等は神を信ず、亦我をも信せよ。吾が父の家には居室多し、若し否らば、我すでに汝等に告げたらん、我は汝等のために處を備へに往く。我もし往きて、汝等のために處を備へなば、再び來りて、汝等を我に取り、我が在る處に汝等をも亦在らしめんとす。汝等は我が往く處をも知り、また其道をも知るなり。」

トマス イエスに白しけるは、「主よ、我等は汝の往く處を知らず、如何にしてか其道を知



を得んや？」

イエス彼に言たまはく、「我は即ち道なり、真理なり、生命なり、誰も我に由らずしては父に臻る者あらず。汝等若し我を識りたらば、必ず吾が父をも識りたらん、今よりは汝等かれを識らん、汝等は既に彼を見たり。」

ピリポ イエスに言ひけるは、「主よ、父を我等に見したまへ、然らば我等に足れり。」

イエス彼に言たまはく、「然か久しく我なんぢらと偕にありしに、汝等なほ未だ我を識ざるか？ピリポよ、我を見る者は父をも見るなり、汝何ぞ「父を我等に見せ」と言ふや？我は父に在り、父は我に在るを汝等信せざる乎？我が汝等に説く言は我の自から擅に説くに非ず、我に居る所の父親ら諸の業を成したまふ也。我の父に在り、父の我に在るを汝等は信せざる乎。然らば業其物の爲に信せよ。誠に誠に我なんぢらに告ぐ、我を信する者は我が成す業を亦成さん、吾な此よりも大なる者を彼は成さん、我わが父へ往くを以てなり。凡そ吾が名を以て汝等が父に求めん者をば、我これを成さん。是父が子に在りて榮を得ん爲なりとす。汝等もし吾が名を以て何事をか我に求めば、我これを成さん。汝等若し我を愛せば、吾が誠命を守れよ。我

父に請はん、而して父は他の保慰師を汝等に與へ、之をして汝等と偕に永遠に止らしめたまはんとす、是即ち真理の靈なり、世は彼を見ず、彼を識ざるに縁りて、彼を受くる克はず、然れども汝等は將に彼を識らんとす。是は彼將に汝等とともに止まらんとし、將に汝等の裏に宿らんとすれば也。我は汝等を孤兒として遺さじ、必ず汝等に來らん。

「尙暫時して後、世は復我を見ること無けん、然れども汝等は我を見る、如何となれば我は活く、而して汝等は活んとすれば也。我は吾父に在り、汝等は我に在り、我は汝等に在ること汝等は彼の日に於て曉らん。吾が誠命を有して之を守る者は是れ我を愛する也、我を愛する者は吾が父に愛せらるべし、我は之を愛し、且これに我を顯すべし。」

(イスカリオテに非ざる) ユダ イエスに言ひけるは、「主よ、汝自己を我等には顯し、世には顯さざるは如何ぞや？」

イエス答へて彼に言ひたまひけるは、「人もし我を愛せば、吾が言を守らん、而して吾が父は彼を愛せん、且我等かれに臨みて、彼の内に居住をなさん。我を愛せざる者は吾が言を守らず。汝等が聽きたる言は我の言に非ず、我を遣したまへる父のなり。」



「我なほ汝等と借にをりて、此等の事を汝等に説けり。我が名にて父の遣はしたまはんする保徳師、すなはち聖靈は一切の事を汝等に教へ、且我が汝等に言ひたらん一切の事を汝等に悟らしめん。我平和を汝等に遺す、吾が平和を我なんぢらに與ふ、世の與ふる如くには非ずして我これを汝等に與ふ、汝等の心をして憂へしむる勿れ、また怖れしむる勿れ。我が汝等に言へるを汝等は聞けり、云く、我去りて復なんぢらに來らんと、汝等若し我を愛せしならば、我が父へ往くに因りて必ず喜ばん、父は我よりも大なれば也。」

「其未だ成らざるに先だちて我今なんぢらに告たり、其の成ん時に汝等をして信するを得せしめん爲なり。最はや汝等と多くは言はじ、此世の君來れば也、彼は我に何をも有する無し。但し我は我が父を愛し且父の我に命じたまひし如く然か行ふを世の知らんことを欲する耳。」

「我は眞正の葡萄樹、吾が父は農夫なり。凡そ我に在て、果を結ばざる枝は彼これを斬去る。凡そ果を結ぶ枝は彼これを潔む、蓋益す多くの果を結ばしめん、我が汝等に説きたる言に因て汝等は已に潔し。我に居れ、さらば我も汝等に居らん。恰も枝の葡萄樹に居るに非れば、獨み

づから果を結ぶこと能はざる如く、汝等も我に居るに非ざれば、亦能はず。我は葡萄樹なり、汝等は枝なり、凡そ我に居りて我の彼に居る者は、是こそ多くの果を結ぶなれ、汝等は我なくしては何をも爲すことを得ざる也。人若し我に居らずば、枝の如く抛たれて、枯れん、而して拾ひ集められ、火に投いれられて焚げん。汝等もし我に居り、吾が言なんぢらに居らば、汝等何にまれ其の欲する物を願はんに、其事なんぢらに遂ぐべし。汝等夥だしき果を結びて吾が弟子となるてふ其事に由りて、吾が父は榮耀を受く。父の我を愛したまへる如く、我も汝等を愛せり。汝等わが愛に居れ。汝等若し吾が誠命を守らば、我が愛に居らん、我亦吾が父の誠命を守りて、彼れの愛に居るが如し。

「我吾が喜悦をして汝等に在らしめ、且汝等の喜悦を充しめん爲に、此等の事を汝等に語り。我が汝等を受する如く、汝等互に相愛する、是れ吾が誠命なり。人その友の爲に己が命を抛つと云ふ是より大なる愛は誰も有ること無し。汝等若し我が汝等に命する所を行はば、則ち吾が友なり。我今ははや汝等を僕と呼す、僕は其の主の爲す所を知らざれば也。我は却て汝等を友と呼べり、如何となれば何にまれ吾が父より我の聞たる事は悉く汝等に知しめられた也。」



汝等われを選びしに非ず、却て我なんぢらを選び、而して又なんぢらを任じ立てたり、是は汝等をして往きて果を結ばしめ、且なんぢらの果をして永く存たしめん爲なり、庶幾くば汝等が吾が名を以て父に願ふ所の者は凡て父これを汝等に賜はん。汝等互に相愛するやう之を汝等に命ず。世もし汝等を憎まば、其が已に汝等よりも先に我を憎みたりしを知れ。なんぢら若し世の所屬なりしならば、世は己の者を愛したらん、然れども汝等は世の所屬にあらず、却て我なんぢらを世より選り離したるなれば、世なんぢらを憎むなり。我が嘗て汝等に告げたる言を記憶せよ、云く、僕は其の主より大ならず、彼等若し我を迫害たらば、亦なんぢらをも迫害ん、彼等若し吾が言を守りたらば、汝等の言をも亦守らん。然し乍ら吾が名の爲に彼等は將に此等の事を皆なんぢらに向ひて爲んとす、是は我を遣はし給へる者を彼等知らざるに坐する爾。我若し來りしこと無く、又彼等に告しこと無くば、彼等は罪なけん、然れども今や彼等は其の罪を辭すべきなし。我を憎む者は、亦吾が父をも憎むなり。我若し他人の未だ曾て行はざる如き業等を彼等の中に行はざりしならば、彼等は罪なけん、然れども今や彼等は現に見たり、而して我と吾父とを俱に憎めり。然は然りながら、彼等の律法中に書されたる語の成就せん爲なる

耳、云く、「彼等は謂なく我を憎めりと。」但し父の所より我が遣さんとする保慰師、即ち父より發出する眞理の靈臨む時、即ち我の爲に證據を作ん、汝等も初より我とにも在りたれば亦證據を作さん。

「汝等が願かざらん爲に我は此等の事を汝等に諭せり。彼等將に汝等を會中より逐んとす、否な、凡そ汝等を殺す者みづから神に盡す所ありと思ふ時來らん。彼等は父をも我をも識らざるが故に、此等の事を汝等に爲さんとす。我が此等の事をなんぢらに告げたるは、時來らん際に汝等をして我がこれを汝等に告たりしを憶起さしめん爲め耳。但し我は汝等と偕に居りし故に、初よりは此等の事を汝等に告ざりき。今や我は我を遣はしたまへる者に往くなり、汝等の中誰も「何處へ往きたまふや？」と問ふ者なき乎。却て我が此等の事を汝等に告げしに因て、憂愁は汝等の心に滿てり。然し乍ら我は汝等に眞實を告ぐ、我の往くは汝等に益す、如何となれば我若し去往かすば、保慰師なんぢらに臨まじ、然れど若し去往かば我これを汝等に送らん。彼臨む時は、世をして自ら罪と公義と審判とを信認せしめん。罪をば、其が我を信せざりしに因りて也。公義をば、我父に往き、汝等もはや我を見ざるべければ也。審判をば、斯世



の君すでに審判るゝに因りて也。我なほ汝等に告ぐべきこと多く有れども、汝等は今これに堪へず、然れども彼、真理の靈きたる時は、一切の真理を汝等に誨へん、如何となれば彼は自ら撞まに言ふに非ざればなり、凡そ其の聽ん所を彼は語らん、又來らんとする事等を我は汝等に示さん。彼は我を榮耀せん、即ち彼は我のものを受けん、而して汝等に示さん。凡そ父の有り給ふ者は成我の物なり。故に我は言へり、彼は我のものを受けて汝等に示さんと。暫時せば汝等はもはや我を見ざらん、而して復暫時せば汝等は我を見んとす。」

是に於て其弟子等の中相互に言けるは、「彼われらに宣ふらく、「暫時せば、汝等は我を見ざらん、而して復暫時せば、汝等は我を見ん、又「我が父へ我往かんとす」と、是は何のことぞや？」

彼等遂に言けらく、「暫時せば」と宣へるは是れ何のことぞや？我等は其の語りたまへる所の何たるを知らずと。」

然るにイエスは彼等が己に問んと欲するを曉りて、之に言たまはく、「暫時せば汝等は我を見ざらん、而して復暫時せば、汝等は我を見んと」我が言しに因りて、汝等たがひに問あふ乎？」

誠に誠に我なんぢらに告ぐ、汝等は哀き且泣かん、然れど世は喜ばん、汝等は憂悶へん、然れど汝等の憂愁は欣喜に變らん。婦女産んとするや、其の期の來れるに因て、憂愁を懐けども、子を産み了るや、世に人の生れたるに因りて、もはや其の苦痛を記憶す。斯のごとく汝等も今こそは憂愁を懐け、我ふたゞび汝等を見んとす、而して汝等の心は茲に喜ばん、汝等の喜悅は誰も汝等より奪ふ者なけん。彼の日には汝等何事をも我に問はじ。誠に誠に我なんぢらに告ぐ、汝等若し吾が名を以て何物をか父に求めなば、之を汝等に與へたまはん。今まで汝等は何事をも吾が名を以て求めたる無し。求めよ、然らば受けん、汝等の喜悅竟に全からん。

「此等の事を我は諺語もて汝等に語らし、明白地に父を汝等に示さん。彼の日には汝等わが名を以て求めん、我は汝等の爲に父に求めんとは汝等に言はず、如何となれば汝等われを愛し、且我が神より出たるを信せしに因りて、父自ら汝等を愛したまへば也。我は父より出て、世に來れり、復世を離れて、父へ往く。」

其弟子たち彼に言ひけるは、「嗚呼今なんぢは明白地に語りたまふ、毫も諺語を語りたまはず。今や我等は知る、汝は萬事を知りたまふ、又なんぢは人の汝に問ふを待ちたまはず。是に



因りて我等は汝が神より出たまひしを信す。

イニス彼等に答へたまはく、『今なんぢらは信するか？ 視よ、時來らんとす、今すでに來れり、汝等は則ち各々おのがじ、散ばり、我を獨り遺さん、然し乍ら我は獨なるに非ず、父われと偕に在せば也。我が此等の事を汝等に告げたるは、汝等をして我に於て安心を得せしめんが爲なり。世に在りては汝等窮難に遭んとす、然れども安んぜよ、我世に勝てり。』

中保的祈禱 約十七ノ一、廿六、  
太廿六ノ卅、

イエス此等の事を語りをはるや、目を天に擧げて、言たまはく、『父よ、時來れり、汝の子をして汝を榮耀せしむる爲め、汝の子を榮耀したまへ。汝は已に一切の肉身を主と爲るの權を彼に賜へり、是れ汝が彼に與へたまへる凡百の者に彼をして永生を與へしめん爲なり。抑も永生とは則ち唯一の眞の神なる汝と其の遣したまへるイエス・キリストとを知る是なり。我は地上にて汝を榮耀しめたり、汝が我をして爲しめんとして我に授けたまへる業を我は全うしたり。父よ、世界の未だ有ざる前に我が汝ともにも有せし榮耀を以て、今茲に汝と偕に我を榮耀しめたまへ。汝が世より甄びて我に授けたまひし人々に我は汝の御名を顯せり、彼等は汝の

ものたり、汝かれらを我に授けたまへり、彼等は汝の言を守れり。汝が我に與へたまへる者は皆汝より出づと彼等は今曉れり。汝が我に授けたまへる言を我は彼等に授けたれば也、而して彼等は之を受け、我が汝より出たるを眞に曉り、且汝が我を遣はしたまひしを信せり。我は彼等の爲に祈るなり、世の爲に祈るに非ず、汝が我に授けたまへる者等の爲にする耳、彼等は汝のものなれば也。吾がものは皆なんぢのもの也、汝のものは我のもの也、我は彼等にありて榮耀せらる。我は最早世に在らず、彼等は世に在り、我は汝に至る。至聖なる父よ、汝が我に授けたまへる者等を汝の名もて護り、彼等をして我等の亦然る如くに一ならしめ給へ。我は彼等と偕なる時汝の名もて彼等を護れり、汝が我に授けたまへる者等を我は擁護せり、彼等の中には一人も失たる者なし、失たる者は唯沈淪の子のみ、以て聖書を成就せしむ。今我は汝に至る、世にて我が此等の事を説けるは吾が喜悦をして彼等の衷に満しめん爲なる也。われは汝の言を彼等に授けたり、然るに世は彼等を惡めり、是は我が亦世のものに非ざる如く、彼等も世のものに非ざれば也。汝が彼等を世より取り去りたまはんことを我は祈るに非ず、唯かれらを護りて惡に遠ざからしめ給はんことを祈る耳。我が亦世のものに非ざる如く、彼等も世のもの



に非ざるなり。願くば彼等を眞理に聖成したまへ、汝の言は眞理なり。汝われを世に遣したまひし如く、我は亦かれらを世に遣はせり。我は彼等のために自己を聖成す、是は彼等の亦眞理に聖成せられんが爲なり。彼等の爲のみに我は祈るに非ず、亦かれらの言に由りて我を信せん者等の爲にもす。是は、父よ、汝の我に於る、我の汝に於る如く、彼等皆一にならん爲、彼等もまた我等に在りて一にならん爲、世をして汝の我を遣したまへるを信せしめん爲なりとす。汝が我に賜へる榮耀をば、我は彼等に與へたり、是は我等の一なるが如く、彼等をも一ならしめんが爲なり。我は彼等に、汝は我に在るは、是れ彼等をして一に全からしめん爲、また世をして汝が我を遣したまへると、我を愛せる如く彼等を愛したまへるとを曉らしめん爲なり。父よ、我の在る處には汝の我に授けたまへる者等もまた我と偕に在んことを我は欲す、然すれば、汝が世界の定立前より我を愛せしに因りて我に賜へる吾が榮耀を彼等に賜せしむるを得ん。至公なる父よ、世は汝を識す、我は汝を識れり、彼等もまた汝が我を遣したまへるを知れり。我は已に汝の名を彼等に知しめたり、復將に知しめんとす、庶幾くば汝が以て我を愛したまへる愛かれらに宿り、且われ彼等に在るを得ん。』

かくて讚美を誦へ畢るや、彼等橄欖山に出ゆけり。

### 第六章 金曜日—苦難の日

ゲツセマ子に於ける苦痛 可十四ノ卅二—卅六、路廿二ノ四十三—

彼等ゲツセマ子といふ處に来るや、イエス其弟子等に言給はく、『我所禱する間、汝等此に坐せよ。』

ペテロ、及びヤコブとヨハネを將て往つ、畏れ且哀み始めたまふ。乃ち彼等に言給はく、『吾が靈魂死るばかりに愛ふ、汝等茲に止まりて醒寤よ。』

少しく進みて、地に倒れ伏し、若協は此時を我より去しめたまへと禱り給へり。

また曰給はく、『アバ、父よ、汝は能はざる所なし、斯の爵杯を我より取たまへ、然ながら我が欲する如くならず、汝の欲する如くならしめ給へ。』

時に一個の聖使天より彼に顯れて之を強めたり。

イエス死の苦に罹りて、其の祈禱り給ふや愈よ久しかり、其汗は血の點滴の如くして地に



垂たり。

イエス祈禱了りて起あがり、其弟子等に來り給ひしが、彼等が憂愁に因て寝れるを見、ペテロに言たまはく、『斯く汝等一時も我と偕に醒寤せる能はざるか？ 汝等誘試に入ざらん爲め、醒寤め且祈禱れ、心は逸れども、肉體弱きなり。』

二次往き祈りて曰給はく、『吾が父よ、此の爵杯もし過去すして、我これを飲ざるを得ざるならば、汝の旨成かし。』

かくて復來り、彼等の睡れるを見給ふ、彼等の目つかれたる也。彼等を離れて又往つ、三次めにも亦同じ言を以て祈り給へり。

やがてイエス其弟子たち來りて、之に言たまはく、『今ははや寢眠て休め。視よ、時近し、人の子罪人の手に賣れん。』

起よ、我等ゆかん、視よ、我を賣ん者近づけり。』

内應と逮捕 可十四ノ四十三、四十五、路廿二ノ四十八、約十八ノ四十九、路廿二ノ四十九、約十八ノ十三、太廿六ノ五十六、可十四ノ五十一、五十二、約十八ノ十二、路廿二ノ五十二、五 彼なほ語れる中に、直に十二の一人なるユダ、並に彼とも、劍や棒を持る大群衆、祭

司長等と學者等と長老等より遣されて來れり。

イエスを賣る者彼等に號を與へて、曰ふ、『我が接吻する者是なり、彼を拏へ、謹みて曳ゆけ。』彼來るや、直にイエスに近づきて、曰く、『ラビ』と、頓て彼に接吻す。イエス彼に言たまはく、『ユダ、汝は接吻を以て人の子を賣るか？』

是に於てイエスは將に己に臨まんとする事等を悉く知つ、進みて彼等に言たまはく、『汝等は誰を尋ぬるや？』

彼等これに答へけらく、『ナザレのイエスを。』

イエス彼等に言ひたまはく、『其は我なり。』

彼を賣るユダも彼等と偕に立てり。然るにイエス彼等にむかひて、『我なり』と宣まふや、彼等は後に退きて、地に倒れたり。

故にイエス再び彼等に問たまはく、『汝等は誰を尋ぬるや？』

彼等いひけるは、『ナザレのイエスを。』



等の者を容して去しめよ、』是に汝の我に賜へる者の中我は一人をも失はず』と、イエスが宣まへる言の成就せん爲なりき。

イエスの周囲にをれる者ども將に及ばんとする所の何たるを見て、イエスに曰けるは、  
『主、われら劔を以て撃べきやと？』

時に、シモン・ペテロ劔を佩きたれば、之を抜きつ、大祭司の僕を撃ちて、其が右の耳を削げり。其僕の名はマルコスと云ふ。

イエス答へて、言たまはく、『是にて容せよ、』即ち彼が耳に捫りて、之を醫し給ひぬ。

時にイエス、ペテロに言たまはく、『汝の劔を其鞘に収めよ、凡て劔を把る者は劔に斃るべければ也。我わが父に乞ふ能はずと思ふか？若し乞はば、彼十二軍餘の天使を今我に遣したまはん。されど若し然せば、斯あるべしと云ふ聖書いかで成就せんや？吾が父の我に賜へる爵杯は我飲ざるべけんや？』

イエス已に迫れる祭司長等、殿司等、および長老等に言たまはく、『汝等は盜賊にむかふ如く劔と棒とを持って、出きたるか？我日々汝等とともに神殿にありし時には、汝等その手を我に

差伸ざりき、然れども今は汝等の時なり、冥暗の勢なり。』

時に弟子たち皆彼を舍きて遁さりぬ。

或る少年裸にて廣布を纏ひて、イエスに従ひをりしが、彼等これを執へしかば、彼その廣布を棄て、裸にして彼等の手を逃れたり。

ユダヤ有司の前の審問 約十八ノ二十二—廿四、可十四ノ五十五—六十一、太廿六ノ六十三、可十四ノ

時に兵隊、將官、およびユダヤ人の下役イエスを撃へて、之を縛りしが、先アンナスの所へ曳ゆけり、彼は其年の大祭司たりしかヤバの外舅なりければ也。カヤバは即ち是れ嘗てユダヤ人にむかひて、民の爲に一人死するは益ありとの忠告を興へたりし者なりき。

但しシモン・ペテロはイエスの後に従ひ行けり、他の一弟子も亦然す。該弟子は大祭司に知られたる者にして、イエスを偕に大祭司の中庭に入りぬ。然れどもペテロは門の外に立てありき。是を以て夫大祭司に知れたる他の弟子出て、門番の女に言ひつ、ペテロを引いたり。

是に於て門を守る婢ペテロに言けるは、『汝も亦斯の人の弟子の一ならずや？』  
彼曰ふ、『然らず。』



恰も寒かりければ、僕等および下役等炭火に立向ひて煖りをり、彼等とともにペテロも亦立て煖りをれり。

是に大祭司はイエスに其弟子の事、および其教道を問へり。イエス彼に答へたまはく、「我は公然と世に唱へたり、ユダヤ人の皆相集まる會堂および神殿にて我は常に教へたり、何をも幽隠處にては説かさりし也。汝何を我に問ふや？我が説きし所を聴聞したる人々に問へ、寔に彼等は我が説きたる所の如何を知れり。」

イエスは是を言給ふや、下役の一人傍にありて、イエスを掌にて打ちて、曰く、「汝大祭司に答ふる斯の如き乎？」

イエス彼に答へたまはく、「我が言ひたる所若し悪くば、其の惡てふ證據を作せ、若し善くば、何を我を扑つや？」

アンナス乃ちイエスを縛りて大祭司カヤバの所へ送れり。

祭司長等および議會全體イエスを死に解さんとして、彼を陷害るべき證據を求めたりしが、得ざりき。是は許多の人彼に對して僞證を提供たれども、其の證據たがひに符ざりければ也。

或者ども起ち、彼に對して僞證をなして、曰く、「我等聞しに彼嘗て言へり、我は手にて造られたる此の神殿を毀ち、手にて造らざる別のを三日のうちに建んと。」而るに彼等の證據またも符ざりき。

大祭司真中に起あがり、イエスに問ふて曰けるは、「汝答ふる言なき乎？斯等が汝に立る證據は如何に？」

イエス默然として何も答へたまはざりければ、大祭司また彼に言けらく、「我活る神に藉りて汝に命ず、汝は果して神の子キリストなるかを我等に告よ。」

イエス彼に言たまはく、「我は是なり、汝等は人の子が神の權能の右に坐し、天空の雲に乗て來るを見ん。」

大祭司その衣を裂て、云ふ、「何ぞ他に證人を見めんや？汝等は其の褻瀆を聞けり、汝等いかに思ふや？」

是に於て彼等みなイエスを死に當ると定む。

是に於てその面に唾し、拳にて彼を撃ち、其目を掩ひて手掌にて其面を打ち、曰けるは、







入らざりき、是は汚れずして、逾越を食ふことを得んが爲なりしなり。是を以てピラト彼等の所に出来りて、言けるは、『汝等此の人に對して何の告訴を提供せんとするや？』

彼等答へて彼に言けるは、『是若し犯罪者に非ずば、我等之を汝に解さす。』

是に於てピラト彼等に言けるは、『汝等かれを取り、汝等の律法にしたがひて彼を審判け。』

ユダヤ人因て彼に言けるは、『我等は人を刑殺す能はずと。』是はイエスが何の死を以て死せんかを示して言たまひし言の成就せん爲なりき。

之を訟へ始めて、曰く、『我等この人を見るに、吾が國民を援し、カイザルに貢賦を納むるを禁じ、自ら我はキリストたる王なりと稱すと。』

イエス祭司長等と長老等より証訴へられしかど、何とも答へたまはざりき。時にピラトイエスに言けるは、『彼等が汝に對して提起る證言の斯く多端なるを汝聞さるや？』イエス一言だも之に答へ給はざりしかば、方伯甚だ怪むに至れり。

是を以てピラト再び公廳に入り、イエスを召いだして之に言けるは、『汝はユダヤ人の王なるか？』

イエス答へたまはく、『汝これを自ら考へて言ふなるか、又は他の者我につきて汝に告しなる乎？』

ピラト答へけるは、『我豈ユダヤ人ならんや？汝の國民および祭司長等なんぢを我に解せり、汝は何を爲したるや？』

イエス答へたまはく、『吾が國は此世よりするに非ず、吾が國もし此世よりする者ならば、吾が臣僕かならず我をユダヤ人に解さるやう戦ふべし、然れども今吾が國は此よりするに非ず。』

ピラト因てイエスに言けるは、『然らば汝は果して王なるか？』

イエス答へたまはく、『汝が言へる如く我は王なり。我は此が爲に生れ、此が爲に世に來り、以て眞理に證を作すなり、凡て眞理に屬する者は吾が聲を聴く。』

ピラト イエスに言けるは、『眞理とは何ぞやと。』  
斯く言をはるや、再びユダヤ人の所に出ゆきて、之に言ひけらく、『我は彼に何の罪案あるをも見ず。』







皆曰く、「十字架に釘けよ。」

ピラト三度めに復かれらに言けるは、「斯人果して何の悪を行ひしや？ 我は彼に死の罪案あるを絶て見ず、故に彼を懲罰して釋さんとす。」

是に於てピラト乃ちイエスを取りて、之を鞭てり。

是に於て兵卒彼を公廳の庭に曳き、全營の人々を喚集めぬ。

彼の衣を褫きて、赤き袍を彼に衣せ、而して又兵卒は棘茨にて冕を編みて、彼が首に戴かせ、其の右の手に葦を持せ、彼が前に跪つき、彼を嘲弄りて曰ふ、「安かれ、ユダヤ人の王よ。」

「頓て掌にて之を打ち。また彼に唾し、葦を取りて其の首を撃ちたり。」

爰にピラトは復出來りて、衆に言ひけるは、「彼に何の罪案あるをも我が見いださざるを汝等に知らしめん爲に、視よ、我彼を汝等の前に曳いだせりと。」

イエス頓て棘茨の冕と絳き衣を着て出きたり給ひければ、又かれらに言けるは、「視よ、斯人！」

斯りしかば、祭司長等および下役等イエスを見るや、叫びて曰く、「彼を十字架に釘けよ、

十字架に釘けよ！」

ピラト彼等に言けるは、「汝等みづから彼を取りて十字架に釘けよ、我は何の罪案をも彼に見いださざれば也。」

ユダヤ人かれに答ふらく、「我等に律法の在るあり、該律法に従へば、彼は死せざる可らず、如何となれば彼おのれを神の子と謂做したれば也。」

是に於てピラトは此の説を聞くや、倍す懼れ、重て公廳に入りつ、イエスに言ひけるは、「汝は何處の者なるや？」

但しイエスは彼に應答を興へたまはざりき。

ピラト因てイエスに言けるは、「汝は我に言はざるや？ 我は汝を十字架に釘くる權あり、又なんぢを釋す權あるを知らざる乎？」

イエス答へたまはく、「汝上より汝に授かれるに非ざれば、我にむかひて何の權もあるべからず、是故に我を汝に解せし者は幾層大なる罪あるなり。」

是よりピラトはまたイエスを釋さんと求めたりしかども、ユダヤ人叫びて曰く、「汝もし此



人を釋さば、カイザルに忠臣ならず、如何となれば凡て自ら王と稱する者はカイザルに叛くなれば也。』

ピラト斯の言を聞くや、イエスを引き出し、鋪石と云ふ處、ヘブルの語にてガハタといふ處にて、審判の座に坐せり。

彼裁判の座に坐しけるに、其妻人を遣はして、云ふ、『汝斯義人の事に何も與る勿れ、我今日夢に彼が爲に太く苦みたるあれば也。』

恰も逾越節の豫備日にして、凡そ十二時頃なりしが、ピラト ユダヤ人に言けるは、『視よ、汝等の王と。』

然るに彼等叫ぶらく、『彼を去れ、彼を去れ、十字架に釘けよ！』

ピラト彼等に言けるは、『我豈なんちらの王を十字架に釘くべけんや？』

祭司長等答へけるは、『我等にはカイザルの外王なし。』

ピラト其何をも成とほすを得ず、只益騒擾のみ起らんとするを看たれば、民の前に水を取よせて手を盥ひ、而して言けるは、『我は斯の義人の血に罪なし、汝等自ら當るべし。』

民擧りて答へて曰ふ、『彼の血は我等の上および我等の子孫の上に歸せよ。』

然れども彼等大聲もて通りつ、彼が十字架に釘けられんことを求め、彼等の聲いよいよ猛く成りぬ。

ピラト民を悦ばせんと欲して、彼等の求むる所をして成らしむべき裁斷を下し、バラバ、乃ち彼等が乞へる夫の殺人と叛亂のために監獄に投せられたる者を彼等に釋し、イエスをば彼等の願意に任して解し遣りぬ。

彼を嘲弄りて後、袍を褫ぎ、原の衣を彼に着せ、十字架に釘けんとして、彼を曳ゆけり。

痛ましき道程 約十九ノ十七、太廿七ノ三十二、路廿三ノ廿六、  
イエスは己の十字架を負ひて、出ゆき給へり。

彼等出る時、アレキサンデルとルフの父なるクレネのシモンが田舎より來るを執へつ、十字架を之に強て負せてイエスの後より擔はしめき。

民の大群衆ありてイエスの跟に従へり、又婦女等も隨ひて彼が爲に哭き哀みぬ。

イエス彼等を顧みて、言たまはく、『エルサレムの女子等よ、我の爲には泣く莫れ、汝等自ら泣くべし。』



身と汝等の子等のために泣けよ。如何となれば、視よ、日將に來らんとす、其時には皆言ん、  
 「石胎なる者、未だ産ざる腹、未だ哺せざる乳は、福なる哉と、」時に人々は山にむかひて言ん、  
 「我が上に墜よ、」岡にむかひて言ん、「我等を掩へと。」青木に若し此の如き事起るならば、枯木  
 には將如何ならん？」

他に尙二兇徒ありて殺されん爲に、イエスと偕に曳れたり。

十字架上の死

太廿七ノ卅三、卅四、路廿三ノ卅三、卅四、約十九ノ十九、廿四、太廿七ノ卅六、路廿三ノ卅五、太廿七ノ卅九、約十九ノ廿三、路廿三ノ卅九、約十九ノ廿五、太廿七ノ卅七、路廿三ノ卅八、太廿七ノ卅八、約十九ノ廿八、路廿三ノ卅六、太廿七ノ卅七、路廿三ノ卅八、太廿七ノ卅八、約十九ノ廿九、路廿三ノ卅七、

ゴルゴダといふ處に至りぬ。是すなはち陶甕の處と云ふなり。また膽を和たる葡萄酒を彼に飲せしに、嘗給ひたれども背て飲給はざりぬ。

其處にてイエスを十字架に釘け、夫の盜賊を一人は右に、一人は左にせり。

イエス乃ち言たまはく、「父よ、彼等は其の爲す所の何たるを知らざれば、彼等を赦したまへ。」

ピラト亦罪標を書きて、十字架の上に掲げぬ。即ち書して、

ナザレのイエス、ユダヤ人の王

故にユダヤ人の中此の罪標を讀める者夥たしかりき、是れイエスが十字架に釘けられ給ひし處は、京城に近かりし上に、フェル語、ギリシア語、およびラテン語にて之を書きたるに縁てなりとす。

是を以てユダヤ人の祭司長等ピラトに言けるは、「ユダヤ人の王」と書きたまふ勿れ、「我はユダヤ人の王なり」と自ら言へりと書きたまへ。」

ピラト答へけるは、「我が書きたる所は書き了れりと。」

斯くて兵卒は彼を十字架に釘け畢るや、其の衣を四分して、毎兵卒一分を取り、また其裏衣を取れり。但し裏衣は上より渾て織れる者にして縫目なかりき。故を以て彼等あひたがひに言けるは、「之をば裂すして、誰のなるか之に附抽んと、」是れ聖書の成就せん爲なり、曰く、「彼等たがひに吾衣服を分け、吾裏衣を附抽にすと。」

兵卒は眞に此事を爲しき。彼等坐してイエスを守り。



衆民は立て觀をれり。  
通行者かれを致し、首を搖て、曰く、「噫神の聖殿を毀ち、三日に之を建なほす者よ、自己を救へ、若し神の子ならば、十字架より下りよ。」

祭司長等並に學者等、および長老等同く嘲弄て、曰く、「彼は他人を救ひて、自己を救ふ能はず。若キリスト、イスラエルの王ならば、今十字架より下りよ、然らば我等かれを信せん。彼は神を頼めり、神もし彼を好せば今救ふべし、彼我は神の子なりと言たれば也。」

同じく懸られたる二個の盜賊の一はイエスを褻瀆して曰く、「汝もしキリストならば、汝自身と我等とを救へ。」

然し乍ら他の一は應へて之を叱り、言けるは、「汝は同じ刑罰に遭たるに尙も神を畏れざるか？我等は其爲たる所に相當する者を受るなれば、固より宜し、然る斯人は何等の惡をも爲たること無きなりと。」斯てイエスに曰けるは、「イエスよ、汝の聖國に來らん時に、我を記憶たまへ。」

イエス彼に言たまはく、「我まことに汝に告ぐ、今日なんぢは我と偕に樂園に在るべし。」

イエスの十字架に接近して其母と其母の姉妹、およびクロバの妻マリヤと、マグダラのマリヤは立てありき。故にイエスは其母と愛する弟子の立る者を見るや、其母に言たまはく、「婦人よ、視よ汝の子を。」

次に該弟子に言たまはく、「視よ、汝の母を。」

斯の時よりして該弟子は彼を己の家に接たり。第十二時より三時に至るまで、地の上面く暗黒となりしが、第三時ごろイエス大聲に叫びて曰給はく、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ？」之を釋ば、「吾が神よ、吾が神よ、曷ぞ我を棄たまひしや？」といふなり。

傍に立る或者ども聞て曰く、「視よ、エリヤを呼ぶなりと。」

斯て後、イエスは萬事の竟れるを知り、聖書の成就せん爲に、言たまはく、「我渴くと。」恰も其處に醋の滿たる器置れてありければ、彼等乃ち醋に浸せる海綿を牛膝草に纏へて、其口に攀げたり。斯りしかば、イエスは醋を受くるや、言たまひけらく、「竟れりと。」

イエス大聲に叫びて、言たまはく、「父よ、吾が靈を汝の手に托すと、是を言ひて氣息を斷給へり。」







石を其墓壁の入口に轉しかけたり。

マグダラのマリアとヨセフの母マリアは、其墓壁を見、また如何にイエスの體軀が置かれたるかを見たり。彼等歸りて香料と香油を調へおけり。

### 第七章 土曜日—静寂と憂愁の日

墓壁に於ける守衛太廿七ノ六十二—六十六

翌日、即ち預備日に次る日、祭司長等およびパリサイ徒等俱にピラトに詣りて、申しけるは、「閣下よ、憶起せば、彼の教唆者、尙生る時嘗て言らく、「我三日の後に復活らんと。」是故に三日めまで、命じて墓壁を守らしめよ、恐くは彼が弟子等來りて彼を竊み、民にむかひて言ん、「彼死者の中より復活りたりと。」然らば後の惑謬は前よりも更に悪からん。」ピラト彼等に言けるは、「汝等に番兵あれば、往て思ふまゝ守れと。」彼等すなはち去りて、番兵に墓壁を固守しめ、石に封印したりき。

## 第七篇 イエスの復活

### 第一章 日曜日—復活の日

地震太廿八ノ一—四

視よ、大なる地震あり、主の使即ち天より降りて近よりつ、石を轉ばして其上に坐せり。其容貌は電光の如く、其の衣は雲のごとし、番兵之に怖れ慄きて死たる者の如くなりき。

空しき墓壁約二十ノ一—十

一週之首の日マグダラのマリア朝釜に、其の尙暗くある時に、墓壁に至りしに、其墓壁より石の取除られたるを見き。是を以て彼走り、シモン・ペテロに往き、暨イエスの愛し給へる他の一弟子に往て、之に言けるは、「主を墓壁より取去れる者あり、彼等が何處に之を置きたるか我等は知す。」

故にペテロと彼の弟子出ゆきて、墓壁に至れり。二人俱に走りしが、彼の弟子ペテロ



よりも疾く走り越て、先墓壁に至りぬ。彼身を屈むるや、布の置れたるを見しかども、未だ入りざりき。

爰にシモン・ペテロ彼につゞきて至り、墓壁に入りて、布の置れしを見たり。首に蒙せし汗巾は布にも置かず、別に一處に捲てありき。次に夫の先墓壁に至りし弟子も入り、見て信せり。是は其の須らく死者の中より復活りたまふべしてふ聖書を彼等いまだ知ざりし故なり。斯て兩弟子は己の宿所に還りぬ。

マリアにまでの顯現 約二十ノ十一

但しマリアは墓壁の外に立て泣をりしが、哭きつゝ身を鞠めて墓壁を覗きしに、皓き衣したる二個の聖使、イエスの死體の置たりし處にて、一は首べに、一は足べに坐せるを見たり。彼等マリアに言けるは、『婦よ、何とて泣くや？』

答へて彼等に言けるは、『吾が主を取去れる者あれば也、其の之を何處に置しかを我知らず。』

彼斯く言ひて、後を回顧れば、イエスの立るを見たるが、其がイエスなるをば知ざりし。

イエス彼に言たまはく、『婦よ、何とて泣くや？誰を尋るやと？』  
マリア園丁ならんと思ひて、之に言けるは、『君よ、若彼を茲より取り去りたらば、何處に彼を置しかを我に告げよ、我これを取らんとす。』

イエス彼に『マリアよ』と言たまひければ、  
則ち回顧りて、ヘブル語にて之に言けるは、『ラボニ』と、即ち『師』と云ふ義なり。

イエス彼に言たまはく、『我いまだ吾が父に昇らざれば、我に捫る勿れ、先わが兄弟たちに往きて、之に言へ。』我は吾が父、汝等の父に、吾が神、汝等の神に昇ると。』

マグダラのマリア乃ち至りて、弟子等に告げるは、『我は主を見たてまつれり、主は云々と我に宣へり。』

婦女等にまでの顯現 路廿三ノ五十五、廿四ノ一、可十六

ガリラヤよりイエスと偕に來し婦女等は、彼等その嘗て調へおける香料を携へて墓壁に至れり。相互に曰けるは、『誰か墓壁の入口より石を我等のために轉ばさん者ぞと？』仰げば、石の已に轉ばされたるを見る、寔に其石は甚だ巨なりき。乃ち墓壁に入りしに、皓き衣を着たる



少年ありて右の方に坐せるを看たれば、騒き怖れたり。彼婦女等に言けるは、「驚く勿れ、汝等は十字架に釘けられたるナザレのイエスを尋ねれど、彼は復活れり、早や此に在す、彼を置たりし處を觀よ—されば往て、彼れの弟子たちとペテロに告よ—彼は汝等に先だちてガリラヤに往く、其の汝等に言し如く汝等かしこにて彼を見んと。」

彼等畏れつゝも大に喜びて、速かに墓壁より出て、弟子等に告んとて、走り往ぬ。

視よ、イエス彼等に行遭て、言たまはく、「安かれと、」彼等進みよりつ、彼れの足を抱きて、彼を拜せり。

イエス乃ち彼等に言たまはく、「懼るゝ勿れ、往て、吾が兄弟にガリラヤへ往けと告よ、彼等かしこにて我を見ん。」

守衛の報告 太廿八ノ十一—十五

婦女等の去りし後、視よ、番兵の中或る者等京城に至り、凡て其の有つる事を祭司長等に告たり。彼等長老等と與に集りて、相議り、多分の金を兵卒に與へて、曰ふ「汝等いへ—彼が弟子等夜來りて、我等の眠れる間に彼を竊めりと。」此事もし總督に聞えなば、我等かれを勸め

て、汝等を安全ならしめん。」

彼等金をとりて、其の教へられたる如くなしたり。是の言エダヤ人の中に流布りて、今日に至る。

エマヲに於ける顯現 路廿四ノ十三—十五

爰に同日弟子の中の二人エルサレムより三里ばかり隔れるエマヲと名づくる村へ赴きけるが、凡て此等の出來事を相互に行々語りつゝありき。

彼等相語り、且自ら相問つゝある間に、イエス自身も亦近よりて、彼等と偕に行たまへり。併し乍ら彼等の目は遏められて、イエスを認識ることを得せざりき。

イエス乃ち彼等に言たまひけるは、「汝等が歩みながら互に相論じ、且憂ふる所あるは、是何の話等なるや？」

一人その名をクレオバと云ふ者答へて、イエスに言けるは、「汝はエルサレムに旅したる者にして、獨り此頃かしこに起りたる事等を知らざるか？」

イエス彼に言たまはく、「何等の事ぞや？」



彼等言らく、「ナザレのイエスに關れる事なり、彼は預言者にして、行と言にて神と萬民の前に能ある者なりしが、我祭司長等および領袖輩は之を死刑に解し、且これを十字架に釘けたり。然れどもイスラエルを救贖べき者は彼なりと我等は望めり。而して今日は畢竟此等の事の成りてより三日めなる也。然のみならず、我等の中なる若干の婦人等われらを驚かせり、即ち彼等未明に墓に詣りしに、彼が屍體を見ざりして、來り報じて云く、親ら聖使の顯現を觀たるに、彼は活たりと告し。又われらの中なる某々も墓に往きしが、婦人等の言たりし如くなるを見、竟に彼を見いださざりき。』

イエス彼等に言たまはく、「愚昧なる哉、預言者たちの凡て説たる事等を信するに心の遲き者よ！キリストは此等の苦を受て、斯く其の榮光に入るべきに非ずやと？」

即ちモーセと一切の預言者より始め、全聖書中において己を指る所の者をば、之を彼等に解明したまへり。

彼等その赴むける村に近づきしに、イエス更に遠く行んと欲するが如く爲したまひしかば、彼等これを強て、曰く、「早晚に垂とし、日すでに昇きたれば、請ふ、我等と偕に留れと。』

適ち彼等とともに入り給ひぬ。イエス彼等とともに食に就き給ふや、麩餅をとりて、祝し、擘て彼等に授けたまへり。彼等の目茲に開けて、彼等イエスを認識むるや、忽ち其目に消さるぬ。

彼等互に言けるは、「彼途上にて語り、且聖書を我等に講開し給へたる時に、我等の心おのれの胸中に熱せざりしやと？」

即刻に起あがりてエルサレムに還りけるが、到りて見れば、十一使徒および彼等と偕なる者等すでに相集りて、言らく、「主眞誠に應へり、既にシモンに顯はれ給へり」と。彼等も亦途上にて何事のありしか、又麩餅の擘状にて如何に主を認識しかを話せり。

弟子等にまでの顯現 約二十九、路廿四、廿七、四十三、

斯て該日、即ち一週の首の日、既に暮て、弟子たちエダヤ人を怖るゝが爲に、門戸を威く閉て、集りをりし處へ、イエス來りて、其中に立ち、彼等に言たまはく、「汝等安かれ。』

されど彼等は駭き怖れて、幽靈を見ると想へり。イエス彼等に言たまはく、「汝等何ぞ駭くや？何ぞ汝等の心に疑團おこるや？吾が手足を觀よ、我なり、拆て觀よ、我に有るを汝等が



視るごとき肉と骨は幽霊に有ること無し。』

斯く言ひて其手と足を彼等に示したまへり。かれら喜びの餘りに猶未だ信せずして異しめる間に、イエス宣ひけるは、『汝等茲に何か食ふべき物あるか？』

彼等乃ち一片の炙魚と一房の蜂蜜を呈しければ、之を取て其前に食し給へり。

斯てイエス復かれらに言たまひけるは、『汝等安かれ、父の我を遣はしたまへる如く、我も亦汝等を遣す。』イエス此を言給ひし時、彼等に氣を吹て、之に言たまひけるは、『聖霊を受よ、誰の罪を汝等赦さんも、其は赦さる、誰の罪を汝等留めんも、其は留まる。』

第二章 復活日以後

弟子等とトマスにまでの顯現 廿九 卅四

但し十二の一にてデドモといふトマスはイエスの來りたまへる時に、彼等と偕に在ざりき。因て他の弟子たち彼に言けるは、『我等は主を見たり。』

彼然し乍ら之に言けるは、『我は彼れの手に釘の痕を見て、厥釘の處に吾が指を入れ、且彼

れの腕に吾が手を入るゝに非ざれば、肯て信せじ。』

八日の後弟子たち再び内に會し、トマスも彼等と偕なりしが、戸を閉てあるに、イエス來りて、中に立ちて、曰給はく、『汝等安かれ。』

斯てトマスに言たまひけるは、『汝の指を茲に差込て、吾が手を觀よ、汝の手を伸て吾が腕に入れよ、信せざる勿れ、信せよ。』

トマス答へて、彼に言けるは、『吾が主よ、吾が神よ。』

イエス彼に言たまはく、『汝は我を見たるに因て信せり、見ずして信じたる者等は福なる哉。』

海邊にて七人にまでの顯現 卅一 卅二

斯後イエス重てテベリヤの海にて弟子たちに現れたまへり、其現れたること左の如し、嘗てシモン・ペテロ暨ピデドモといふトマス、ガリラヤのカナよりせるナタナエル、ゼベダイの子等、並に他の二弟子、俱に在りき。

シモン・ペテロ彼等に言けるは、『我は漁りに往く。』



彼等これに言へらく、『我等も汝と與に往く。』

乃ち皆出ゆきて、舟に登りけるが、該夜は何をも捕へざりき。夜明になれるや、イエス岸に立ち給ひけるが、弟子たちは其がイエスなるを知ざりき。

因てイエス彼等に言たまひけるは、『子等よ、何か着あるや?』

彼等答ふらく、『無し。』

イエス彼等に言たまはく、『網を舟の右に下せ、然らば獲ん。』

彼等すなはち下しければ、魚の夥だしきに因りて之を引く能はざりき。

故にイエスの愛したまへる夫の弟子ペテロに言けるは、『主なり。』シモン・ペテロは主なり

と聞くや、(裸なりしかば)衣を纏ひて、海に飛いりぬ。

然し乍ら他の弟子たちは、魚の滿てる網を引きつゝ、舟にて來りき(是は陸を去ること遠

からず、約そ五十間計なりければ也)。

頓て陸に登るや、炭火の在るありて、其上に一尾の魚の載せたるを麵餅とを見たり。イエ

ス彼等に言たまひけるは、『汝等が今捕へたる魚の若子を持きたれ。』

シモン・ペテロ乃ち登りて、網を陸に引きたりしが、大なる魚百五十二尾を滿せり。斯く夥だしかりしと難も、網は裂ざりし也。

イエス彼等に言たまひけるは、『來りて、食せよ。』

但し其偕に食せる者等は是れ主なりと知たれば、一人も『汝は誰なる?』と敢て問ふ者無り

き。

イエス乃ち進みて、麵餅を取りて、彼等に與へ、魚をも亦然し給へり。

イエス死者の中より復活へりて後、その弟子等に現はれたまひしは、是にて既に三次めな

り。

爰に彼等食し了りし時、イエスはシモン・ペテロに言たまはく、『ヨハネの子シモン、汝は

此等よりも増して我を愛するや?』

彼イエスに白すらく、『然り、主よ、我が汝を愛するを汝は知たまふ。』

イエス彼に言たまはく、『吾が羔羊を牧せよ。』

イエス再び彼に言たまはく、『ヨハネの子シモン、汝は我を愛するや?』



彼イエスに白しけるは、「然り、主よ、我が汝を愛するを汝は知たまふ。」  
イエス彼に言たまはく、「吾が羔羊を牧せよ。」

イエス三次かれに言たまはく、「ヨハネの子シモン、汝は我を愛するや？」

ペテロは三次めに又も「汝は我を愛するや？」と己に言ひたまひしに因りて憂へたりしが、遂に之に白すらく、「主よ、汝は知りたまはざる所なし、我が汝を愛するを知りたまふ。」

イエス彼に言たまはく、「吾が羊を牧せよ。誠に誠に我なんちに告ぐ、汝若かりし時には、自ら帯して、其欲する處に歩みたり、然れども老たらん時には、汝手を伸ん 而して他人なんに帯し、汝の欲せざる處へ曳ん。」

此は彼が如何なる死を以て神を榮耀せんとするかを表して言たまひし也。イエスこれを言をはり給ふや、ペテロに言たまひけるは、「我に従へ。」

ペテロ願みたれば、イエスの愛したまへる夫の弟子の從へるを見き、彼は亦是れ晚餐の際にイエスの胸に横はりて、「主よ、汝を賣ん者は誰ぞや？」と言ひし者なり。是を以てペテロは彼を見るや、イエスに言けるは、「主よ、彼は如何ん？」

イエス、ペテロに言たまはく、「我が來るまで彼が斯て留らんことを我欲す、是れ汝に何かあらん？汝は我に従へ。」

斯りしかば該弟子は死せじと云ふ説兄弟たちの中に傳はれり、然し乍ら彼は死せじとイエス之に言ひたまひしに非ず、「唯我が來るまで彼が斯て留らんことを欲す、是れ汝に何かあらん」と言給ひし而已。

山上にて十一人にまでの顯現 二十廿八ノ十六一

爰に十一弟子ガリラヤに往き、イエスの彼等に命じ給ひたる山に至り、彼を見て拜せり、然る尙疑へる者もありき。イエス乃ち進みよりて、彼等に語りて、曰たまはく、「天にても地にても一切の權は我に賜はれり。故に汝等往きて萬國民を訓へ、父と子と聖靈の名を以て彼等に洗禮せよ。凡て我が汝等に命せし事を悉く守ることを彼等に訓へよ、視よ、我は世の終末まで常に汝等と偕に在るなり。」

最終の顯現と昇天 路廿四ノ四十四一 五十三

彼等に言たまはく、「我が猶汝等とともに在りし間汝等に告たる言辭は是なり、曰く、モ一



セの律法中に於ても、預言者の書中に於ても、詩篇中に於ても、凡て我を指て録したる所の事等は必ず成就せざる可らずと。』

願て彼等の爲に精神を啓きて、聖書に到達せしめ給ふ。イエスまた彼等に言たまはく、『斯の如く録されたり、斯の如くキリストは苦難をうけて死者の中より三日めに復活らざる可らず、また彼の名を以て悔改と罪の赦宥は、エルサレムより始めて、萬國民に宣傳へられざる可らず。汝等は此等の事の立證者なり。吾が父の約したまはん者を我なんぢらに遺さんとす、されば汝等は上より權力を以て裝ははるゝまで京城に居れよ。』

斯くてイエスは彼等をベタニアにまで率ひ出で、厥の手を舉て彼等を祝し給へり。彼等を祝する間に彼等を離れて、天に擧られたまひき。彼等は之を拜し奉り大なる歡喜を以てエルサレムに歸りぬ、而して恒に神殿に於て神を頌讚し、且祝し奉りつゝありき。

此の外にも尙許多の休徴をイエスは其弟子たちの眼前に行ひたまひしかども、其は本書に

聖書 基督傳終

記載す、唯以上の事等を記載せ、以て汝等をしてイエスは神の子基督なりと云ふことを信せしめ、且なんぢらに信じて彼れの名に藉りて生命を獲せしめんと欲する耳。



訂 正

頁	行	誤	正
五	十四 十五	是れ何事も神には能はざる者なければ也	是れ神の言一も能力なき者にあらざれば也
十八	二	二歳以下の嬰兒を	二歳以下の男兒を
廿九	一	ヨナの子	ヨハネの子



明治四十三年十二月七日印刷  
明治四十三年十二月十日發行

(定價金六十五錢)

不許  
複製

著者 大宮 季 貞

發行者 福永 文 之 助

印刷者 村岡 平 吉

印刷所 福音印刷合資會社

(振替東京五五三  
電話新橋一五八七)

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地  
警 醒 社 書 店

大賣捌所

東京市本郷區春木町二丁目廿三番地  
警 醒 社 支 店



大宮季貞編

# 對觀四福音書

定價 上製七十五錢  
並製六十錢  
郵税 六錢

四福音書の記事の重複前後し且相互に錯誤せる事は、聖書研究者、殊に初學者の困難とする所なり。本書は其困難を助けん爲に歐米に著名なるゴスペル・ハアモニイの數種の長を取りて纂譯せられたもの、四福音書を信ずべき批評の結果に従ひ一團の系統をなし、同種の記事は併記し、異種の記事は正確なる順序に列記し、一目して四福音書の異同を知らしむ。聖書研究家の座右に必ず備ふべきもの

廣島高師教授 文學士 栗原基譯

# ノイ耶穌傳

定價 八十錢  
郵税 八錢

平凡にして頑冥なる基督傳と、突飛にして絶望的なる基督傳との間に立ちて、最も公平に、且穩健なる基督傳は即ち本書也。本書は決して舊に捉まらず、また奇に走らず、細心なる研究と、明快なる果斷と、妥當なる常識とに由りて、問題を頗る簡明に解決したるもの、殊に原著者が「紳士的」なる言葉を以て記述したる一事は、本書をして其の存在の理由を與ふるものなり。



教授リース原著  
田中達譯

(再版)

# 基督傳

定價一圓三十錢  
郵稅十二錢

基督傳は嚴密なる意味に於て曰へば、基督に關する考証的史論に外ならず。此書は諸大家の論究と並びて一方の權據となるもの云ふよりも、寧ろ諸大家の論究を能く咀嚼融和して一團の組織となし、最も公平なる仲裁者として基督傳に關する智識の概要を讀書家に知らしめんとするにあり。故に本書は最も普通包濶的にして、基督傳に關する一般の智識を得るを以て満足する人にも、更に進んで個々の深き研究に入らんとする人に与りても先第一に讀むべき書なりといふべし。

田村直臣著

# 對照聖書辭典

定價一圓廿五錢  
郵稅八錢

聖書の中には種々難解なる意味の字句あり、又同一の熟字の所に顯るゝあり、之等を相互に交々對照して考察する時は義自ら確然とするに至る、此方法に便ならしめんが爲に本書は作られたるなり。たこへば、限りなき命と云ふ一語も所に由りて其の用あらるゝ意味を異にす、之を本辭典により所々其異なる個所を求めて、相對照せず、普通の字引の如くならず聖書を以て聖書を解釋するの便宜を有す。



1925

柏井 園譯

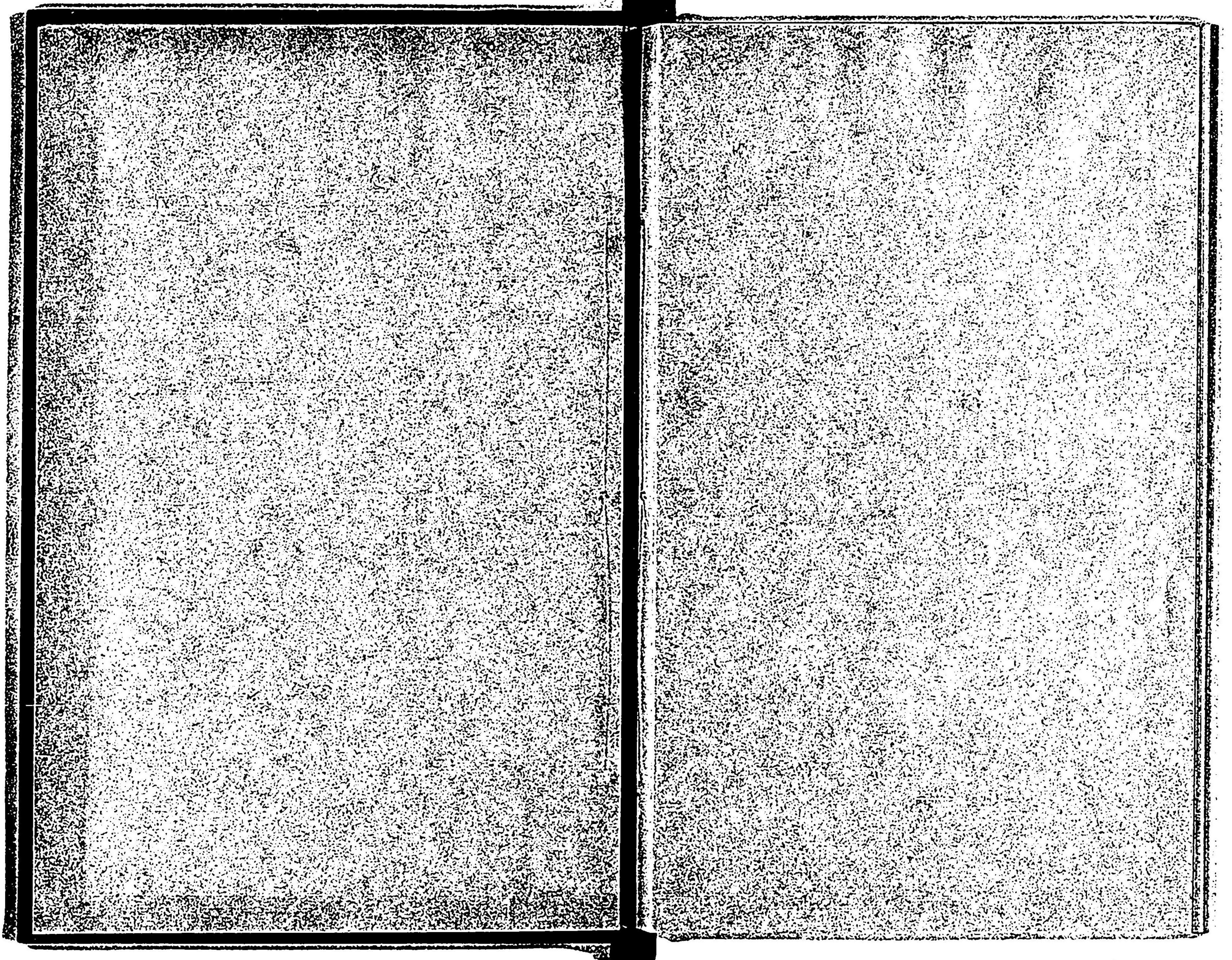
# ルニコ 基督傳

寫眞版拾葉入

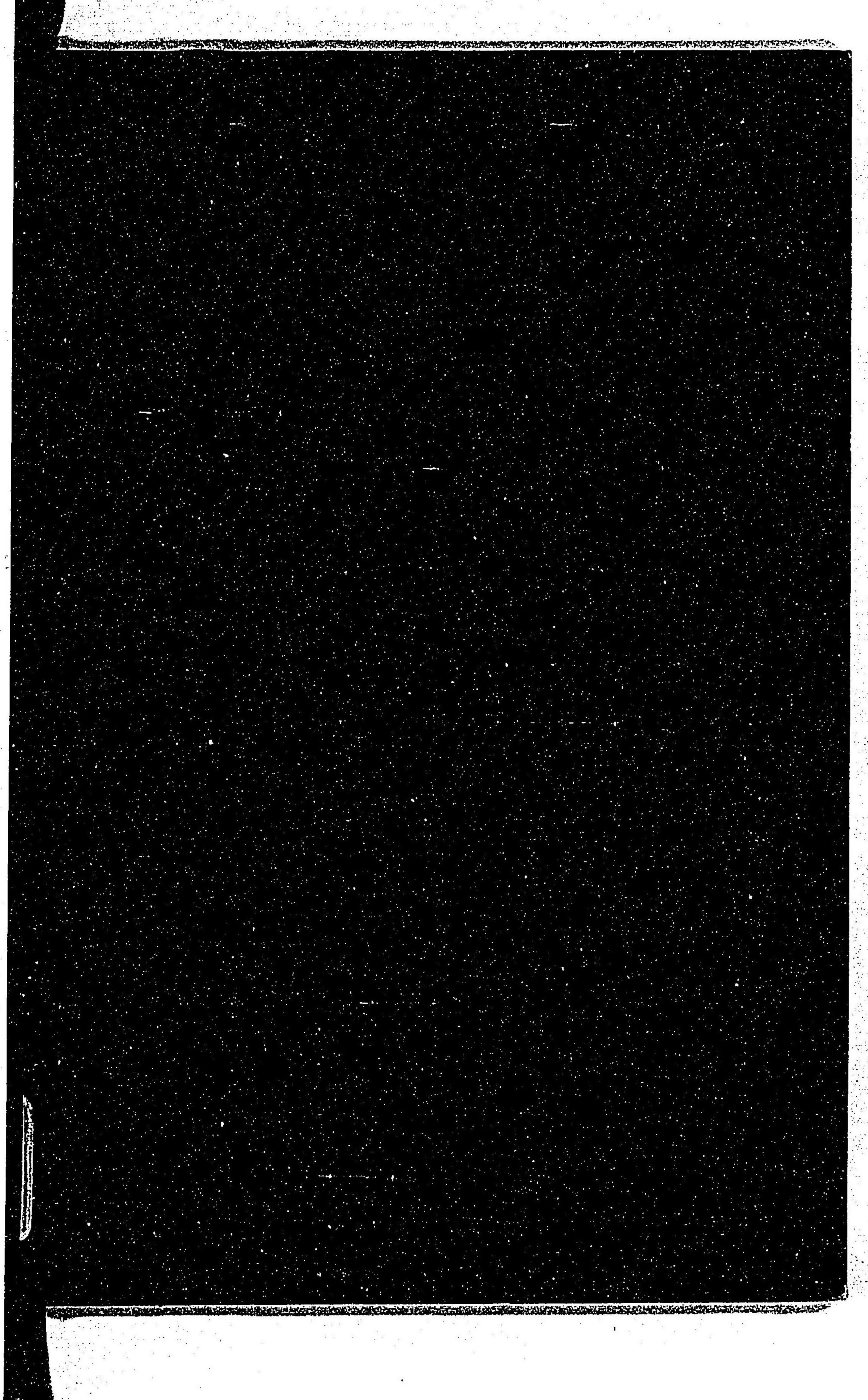
上製 一圓 郵稅 十二錢  
並製 七十錢 八錢

基督傳は種々あれども、或るものは批評的なるに過ぎ、信仰の料  
とならず、さりて信仰的に過ぎたるものはあまりに平凡なり。  
本書は敬虔なる博士が、基督の傳をば最も穩健なる立場に於て記  
述せられたるもの、殊に其文章の流暢典雅なるに至りては其倫を  
見ず。加ふるに譯者柏井氏は基督教會の能文家として第一流にあ  
るの人。原意を表して頗る細且微なり。











324  
213

(M)

020552-000-0

324-213

基督伝(聖書)

大宮 季貞 / 著

M43

ABI-0365





